

目次

序章	3
----	---

【山鉾巡行篇】

第一章 祇園祭礼図の系譜と特質	23
第二章 神宮文庫蔵「祇園祭之図」について——祇園祭礼図の成立に関する試論——	269
第三章 サントリー美術館蔵「日吉山王・祇園祭礼図屏風」再考	295
第四章 出光美術館蔵「祇園祭礼図屏風」小解——補筆による鉾頭改変を手掛かりに——	329
第五章 大阪歴史博物館蔵「祇園祭礼図屏風」研究序説——秀吉思慕の祇園祭礼図——	363
第六章 京都国立博物館蔵「祇園祭礼図屏風」の史的位置	383
第七章 「天下祭・祇園祭礼図屏風」について	423
第八章 横山華山筆「祇園祭礼図巻」研究——「近世後期風俗画」の新地平——	447

第九章 京都市立芸術大学芸術資料館蔵「祇園祭鉾調卷」について

——新出の横山華山筆「祇園祭礼図巻」画稿の紹介をかねて……………

477

第十章 描かれた鷹山——鷹山保存会蔵「祇園会太郎山人形写生画幅」の紹介をかねて……………

491

第十一章 河辺華拳筆「地獄祭礼図巻」画稿について——祭礼図と地獄絵の親和性……………

533

第十二章 明治二十六年、山鉾は岡崎をめざす——新出の「明治廿六年岡崎大極殿四回博覧会地鎮祭の時

地かためのため引出せしの時の写真」の紹介をかねて……………559

【祇園ねりもの篇】

第一章 もう一つの祇園祭〈祇園ねりもの 近世篇〉……………

601

第二章 宝暦五年刊『祇園ねり物絵づくし』から読み解く祇園ねりもの……………

685

第三章 國學院大學博物館蔵「京祇園会ねり物大ミセ姿」について

——祇園ねりものを描く摺物の予定稿と決定稿に関する一試論……………

711

第四章 横山華山筆「祇園祭礼図巻」図解——祇園ねりものの描写を中心に……………

729

第五章 万延元年の祇園ねりもの

——「祇園奉能御千度里の賑ひ」と「祇園御千度さとの賑ひ」の紹介をかねて……………

747

第六章	もう一つの祇園祭〈祇園ねりもの 明治篇〉……………	771
第七章	都をどりと祇園ねりもの——昭和五年の「園の賑」をめぐって——……………	825
第八章	もう一つの祇園祭〈祇園ねりもの 戦前篇〉……………	857
第九章	もう一つの祇園祭〈祇園ねりもの 戦後篇〉……………	879
終章	……………	917

初出一覧／あとがき／参考文献／索引

序章

はじめに



図1 「大日本神事見立数望」個人蔵

まず一枚の摺物を眺めることから始めよう〔図1〕。版元や祭礼の名を勘案するに、まずは江戸末期の制作とみてよい一点である。画面の上部に「大日本神事見立数望」とあり、これがこの摺物の名とわかる。一見して気付くと思うが、相撲の番附に見立てて全国の祭礼を格付けした摺物である。東に五十七、西に五十七の計一一四もの全国の祭礼が番附として列挙してあることを思えば、「数望」を「すもう」と読ませるあたり、観る者の頬も思わず緩むというものだ。小さな画面の摺物の中によくぞここまで多数の祭礼の名を施したと一驚させられる。

それでは、画面に目を近付けてみよう。番附の上位から眺めみるに、「東之方」の大関、つまりは最上位が「京 祇園会」となっている点に早々と気付かされる。今となつては聞き覚えのない祭礼の名も幾つか掲出されており、近世以前の全国の祭礼を考究する上でも貴重な史料といえよう。

「日本の祭」と聞いて真つ先に思い浮かぶ祭礼は何であろう。

問うまでもない。そう、祇園祭である。祇園祭という祭礼の名を聞いて知らないと答える人は日本にいないのではないか。「大日本神事見立数望」でみた通り、今も昔もそれは変わらない。日本の三大祭を挙げる際、必ずその名が出る祭礼である。

しかしながら、といたい。祇園祭という祭礼の存在を知っている人でも、祭の歴史や変遷に関してはどれだけのことを知っているのだろうか。どの程度理解しているのだろうか。どれだけのことを語れるのだろうか。そのようにいわれば、一気に心許なくなること必定ではないだろうか。京都に住まう人にとって「京の夏」の代名詞だけに、祇園祭はあまりにも身近すぎて、ごく当たり前の存在となっている。それ故に研究対象としてその名が大きく取りあげられる機会は実に乏しかったといわざるを得ない。わけでも、美術史のみならず、祭礼史や芸能史、文献史学といった分野において、近世以降の祭儀に関しては研究対象として議論の俎上に載ることはこれまでに殆どなかった。判で押したように、中世末期の祭儀ばかりに各分野の研究者の関心がこれまで大きく集中していたことを思えば、あまりにも偏った祭礼観であったといえよう。

果たしてこれでよいのだろうか。私はこのような疑問をずっと抱き続けてきた。そう、これでは、祇園祭の全体を見渡す視点が大きく欠落していたといわざるを得ないではないか、と。そのような疑問を自分なりに解消しようとする試みを反映させたのが本書であり、その書名の通り、「描かれた祇園祭」を軸にその祭儀の変遷を読み解こうと試みる一書なのである。

一 本書の目的と構成

以上のような立場に軸足を置きながら、本書の構成は以下の通り、二部立ての構成をとる。すなわち、「山鉦巡行篇」と「祇園ねりもの篇」からなり、その内訳は前者が十二章、後者が九章の論考の全三十一章によって構

成されている。それでは、本書で論じる範囲や構成に関し、各篇の概要を略述して読者の便宜を図ることとしよう。

各篇の輪郭を記す前に、話の前提として、祇園祭の創始に関する点は触れておかねばならない。実のところ、祇園祭がいつ、いかなる理由によって創始されたのかも、研究者によって諸説あり、いまだ定説をみていない。確たる一次史料の数や量に恵まれず、想像を逞しくせざるを得ないのがその大きな理由だが、貞観年間に頻発した地震がその創始の大きな契機となったという主張が保立道久氏によって近年なされるに至った。⁽¹⁾ 悪霊を慰撫する御霊会がその創始理由としてこれまで広く考えられてきただけに、この主張は新しい視点による解釈として注目される。

東日本大震災後程なくの時期に呈示された説であることも手伝い、保立氏の主張は新聞やテレビといった報道を含めて近年各所で声高に喧伝されている。既に市民権を得たかのような扱いであるわけだが、この新説が正しいか否かは今後議論を積み重ねていく必要があるように思われる。その点だけはここに記しておきたい。勘違いしてほしくないが、保立氏の説を真っ向から否定しているのではない。前述の報道のように先走るのはいかなものか、といたいのである。その手の報道は、議論を重ね、研究者や八坂神社などの共通認識が固まってからでも遅くはなからう。

(Ⅰ) 山鉦巡行

祇園祭ときいて真っ先に思い浮かべるのは山鉦巡行だろう。蒸し暑い宵山の夜、そして巡行の道々で祇園囃子は奏でられるが、そのコンチキチンの囃子の音色に彩られた華麗な世界は、古来より多くの人を魅了してやまない。

七月十七日と同日二十四日（近世以前は旧暦の六月七日と同日十四日）に前祭と後祭の山鉾がそれぞれ巡行する。

前祭と後祭の日程が戦後に同一日となり、合同巡行という形式が採用された時期があったが、平成二十六年（二〇一四）より従前の祭儀に戻されたことは記憶に新しい。

山鉾巡行の歴史について概観しておこう。現時点の研究において、山鉾の登場は鎌倉末期頃とされているが、文献史料の上でその姿が登場するのは少し下る南北朝期に入ってからのことである。現在のような車輪を有する大型の鉾は、この南北朝期以降の史料にみる「久世舞車」に端を発するものとされている。⁽²⁾ 残念ながら、この時期の祭儀の様子を表現した絵画史料は現在確認されておらず、この久世舞車がいかなる姿であったかは明瞭でない。

八坂神社に伝存する『祇園会山鉾事』によれば、応仁の乱前には前後両祭の山鉾は計六十基と実に多くの数が出されていたが、乱後の長い中断の後には三十六基とその数を減じていることがわかる。⁽³⁾ しかしながら、この数はいずれも現在の三十三基より多い点は注目されよう。中世の山鉾巡行がいかに盛大なものであったかを類推させるに余りある記述といえる。

本書の「山鉾巡行篇」は全十二章から成るが、第一章では書名の通り、「描かれた祇園祭」の変遷について、絵画史料を軸に追いかける作業を試みる。いわば、この章は総論であり、まさに「描かれた祇園祭」を時系列で大観したものといえよう。続く第二章から十二章までは具体的な作品を取り上げて論じる各論という位置付けになる。ここでは、特定の時代に偏らず、中世以前から近代以降まで幅広く作品を個別に掲出して論じている。重要文化財に指定されている著名な「祇園祭礼図屏風」（六曲一双 出光美術館蔵）を始め、新出作品や近年とみに多くの分野の研究者の注目を浴びている「日吉山王・祇園祭礼図屏風」（六曲一双 サントリー美術館蔵）といったラインアップである。

なお、第一章は総括的内容だけに、「山鉾巡行篇」の最初ではなく、同篇の最後に回すべきものかもしれないが、全体の構成を明確にするために最初へ置くこととした点を諒とされたい。

中世以前の祇園会は文献史料を紐解くに、多種多様な芸能文化が窺い知られて研究者の興趣を誘うが、私はその手にはのらない。現在の祇園祭の祭儀がいかなる変遷を経て成立したかを探るには、近世以降の行方を辿る作業が必定ではないか。「山鉾巡行篇」における筆者の大きな目論見がここにある。

八坂神社には「八坂神社文書」と総称する史料が所蔵されている。中世以降の膨大な量の文書がまとまって保存しており、現在は重要文化財に指定されている。その翻刻がなされ、「八坂神社文書」や『八坂神社記録』の書名で臨川書店より刊行され続けているため、聞き覚えのある人も多かろう。

しかしながら、である。中世末期から近世前半期にかけての期間についていえば、この八坂神社文書にはその時期の文書が大きく欠落しており、その時期の祭儀がいかなるものであったかを文献史料から探る作業が困難となっているのである。それに反して、この時期には洛中洛外図や祇園祭礼図といった絵画作品が数多く制作されている。これらの絵画史料を精査する作業を経て、この時期の祇園会の有様を視覚的に知ることができるのである。

ただし、前述のように、絵画と文献の照合作業は極めて困難な難点を有する。だからといって、尻込みしている場合ではなからう。いつか誰かがやらねばならないわけで、数百点にも渡る絵画史料を渉猟、実見してそこに描かれた祭儀を精査するとともにその結果をまとめる作業を本書で行ったのである。なお、八坂神社文書以外に伝わるそれ以外の文献史料、わけでも延宝四年（一六七六）の『日次紀事』⁴にみる「鉾と鉾の間は山三基」という山鉾巡行の鉄則を見い出した河内将芳氏の研究は、絵画史料に描かれた祭儀が正確か否かを判断する上で一つの基準となる。本書でも度々引用することとなるが、近年の近世祇園会研究において実に有意義な成果といえよ

う。

以上の視点をもとに、山鉾巡行の変遷を絵画史料より通覧的に追いかけることが可能となったわけである。

(Ⅱ) 祇園ねりもの

祇園祭はユネスコの無形文化遺産に近年登録されたが、その内訳は「京都祇園祭の山鉾行事」であった。いうならば、山鉾巡行に特化された登録であったわけで、そのことを思えば、「祇園祭といえば山鉾巡行」という図式が一般的なのは抗えない事実であろう。

なるほど正論である。しかし、このような見方は祇園祭を一側面から捉えたにすぎない。他の祭儀が後々蔑ろに扱われがちになるのではないか、という疑いが胸に兆したことを私は否定できない。とりわけ、無形文化遺産に登録されることで、前述した図式の波及力は決定的なものとなり、その影響力の大きさをや測り知れないからである。

祇園祭は山鉾巡行が全てではない。八坂神社から奉仕される神輿に関わる行事、例えば神輿渡御は、厳密に言えば前述の無形文化遺産には含まれていないのである。むしろ、歴史と伝統のある祇園祭だけに、研究者や山鉾町、行政、そして八坂神社、その氏子など各々の立場や見方の相違によって、祇園祭の範囲をどこまで広げるのか、あるいはどこまで狭めるのか、といった解釈の振幅が著しいことはもちろん承知している。私の懸念が取り越し苦労に終わればさして問題ないわけだが、議論の解決はそう易々とすまないだろう。

誤解しないでほしいが、私はユネスコへの批判をしているのではない。無形文化遺産の登録はたいへん喜ばしい。祇園祭を広く周知させる大きな手立てとなるだけに、手放しでは喜べないのが筆者の本音というわけなのである。

前口上が長くなったが、それには理由がある。本書の「祇園ねりものの篇」で縷々記すのは、山鉾巡行や神輿渡御といった行事から取り残された、いわば「忘れられた祇園祭」の行事の記録である。それは厳密に言えば、祇園祭の「正式」な行事ではない。そういった理由も大きな足枷となっているのだろうか、祇園祭に奉仕する人、そして研究者でさえも知らない人が実に多い行事なのである。そのため、これから一つ一つそれを丹念に紐解き、読み解く作業を試みることにしたい。過去にこのような行事が祇園祭と並行して行われていたということ、そして祇園祭がなければ行われなかったことを少しでも多くの人に知ってもらいたい。その一心で本篇が編まれた点をここに記し留めておくこととする。

話が前後することとなったが、祇園ねりものについて簡単に説明しておきたい。神輿洗という行事がある。神輿を鴨川の水で清める儀式である。この際に祇園の芸妓が仮装姿に身を包み、祇園花街をねり歩いた。これを祇園ねりものという。昭和三十五年（一九六〇）まで続けられたが、今となっては知る人も少ない。

「祇園ねりものの篇」では、祇園ねりものの発生と展開に関して時系列に沿って論じる。祇園ねりものに関して、田中緑紅（一八九一―一九六九）が戦前より精力的に著作や論考を発表し、⁽⁵⁾近年では舞踊史や上方浮世絵、歌舞伎の観点、あるいは花街文化史の視点から個々に論及されたにすぎない。⁽⁶⁾そういった現況の中、筆者は福原敏男氏と祇園ねりものを単独で扱った一書を上梓するに至った。⁽⁷⁾ここでは選書という紙幅の関係上、近世以前のねりものに絞って論述を重ねざるを得なかったが、本書では近代以降、戦後に至るまでの祇園ねりものの変遷を追う作業も加えて行なった。いわば、祇園ねりものの通史を本篇で試みたわけである。

以上の二部構成で、山鉾巡行と祇園ねりものの歴史と実態を、どのように描かれたのかを軸にして、時系列に沿う形で網羅的に検討、総括するよう努めた。今後の祇園祭研究のための通史的な基礎を提供することを本書は

目指している。なお、旧稿の再掲に際し、増補改訂を適宜加えた。

二 四人の先学——田中緑紅、杉浦丘園、若原史明、松田元の祇園祭研究——

近世以降の山鉾巡行や祇園ねりものについて何かしら調べようと試みる際、必ず辿り着く人物が存在する。それは、先に触れた田中緑紅の他、杉浦丘園（一八七六—一九五八）、若原史明（一八九五—一九四九？）、松田元（一九〇八—一九八）の四人である。

今となつては聞き慣れない名が並んでいるかもしれない。無理もなからう。この四人の人となりは後に詳述するが、彼らに共通するのはいずれも在野の研究者であつたことである。しかし、それだけに山鉾町や祇園の人々に寄り添い、市井の立場から試みる研究態度は山鉾町や祇園に住まう人々の大きな共感を持たれたものと思われる。わけでも、京都では田中緑紅が今でも「緑紅さん」、そして松田元が「元さん」といずれも「さん」付けで親しみを込めて呼ばれるのはその証左とならう。

この傾向とは裏腹に、昨今の祇園祭研究において、この四人の成果を援用して論述を進める者は極めて少ない。どの研究分野にもありがちだが、彼らに共通する「在野の研究者」という点が大きく災いしたのはいうまでもない。わけでも、緑紅と丘園は稀代の収集家としても知られており、その収集品を使つて論を組み立てていたため、作品の名称の付け方やその員数、法量、さらには挿図で紹介されない史料が殆どである。そのために彼らの死後、現在の所蔵先が掴めず、いかなる内容であつたかを確かめる術がない史料も多い。影印や翻刻も施されておらず、引用するには躊躇せざるを得ない史料内容も多い点は確かである。

しかしながら、四人の研究を虚心に眺めれば、今となつては確認を取ることすら困難な行事についても詳述されているものが多い点は目を惹く。わけでも、田中緑紅や若原史明の研究は他の研究者の論考には記されていない

い成果も多く、その研究内容が本書の検討で改めて確認され、彼らの記述の正しさが実証できたものもある。そのことを思えば、四人の成果を蔑ろにするのはにべもない行為であろう。ここでは、彼らに敬意を払う意味でも、この四人の人となりについて以下に列記し、彼らの功績を周知する作業を行っていこう。

(Ⅰ) 田中緑紅（一八九一～一九六九）

緑紅は、「京都」という伝統都市の歴史や文化、民俗について何かしら調べようとする者にとって実に大きな存在である。先にも記した通り、「緑紅さん」と今でも親しみを込めて呼ばれるように、市井の立場に軸足を置き、京都の歴史や民俗に関する研究に生涯を捧げた人物である。京都の伝統文化を知らしめるために、その裾野の拡大の一翼を担った存在であった⁽⁸⁾。

緑紅の祇園祭に対する視野は実に広い。祇園祭研究はしばしば山鉦巡行に偏りがちだが、祇園ねりものにも怠りなく平等に目配りし、戦前より数多くの著作や論考を精力的に発表してきたのは特筆に値する。祇園ねりものに関していえば、前述した通り、緑紅の著作以降、祇園ねりものに特化して刊行された書物は筆者が共著として発表した『祇園祭・花街ねりものの歴史』まで待たねばならなかった。実にその間五十年以上もの歳月が必要となったのである。祇園ねりものが研究の俎上に載る機会がいかに乏しかったかが理解されよう。

ここで一書を掲げることとしたい。「贈／佐古慶三殿／田中緑紅」と記す緑紅自筆の外袋が付属する『文献に顕はれたる祇園会に関する目録』（一冊 個人蔵）である。近世の道頓堀など大阪の歴史研究で知られ、大阪商業大学で教鞭をとった佐古慶三（一八九八～一九八九）宛の贈呈本であることがわかる⁽⁹⁾。同史料は昭和三年（一九二八）に有楽会より刊行されたもので、この有楽会とは緑紅が主催した研究会のことである。なお、有楽会に關しては「祇園ねりもの篇」第七章でも触れることとする。若き日から京都のみならず緑紅の交流が幅広かった



図2 田中緑紅『京のお正月』

稿本 個人蔵

ことを物語る一冊であらう。

続けて挙げるのは『父と私——忌明の御挨拶にかへて』（一冊

個人蔵）という小冊子である。管見の限りでは未紹介の史料であり、

いずれの図書館や資料館などの施設にもその所蔵は現時点で確認されていらない。書名の「父」とは緑紅の父、泰輔（一八六五―一九三

四）のことである。医者であるとともに、児童福祉事業にも従事した人物で、「祇園ねりもの篇」第七章で取り上げる平安徳義会は彼

が開設したものである。

史料に目を戻せば、父への思いが緑紅によつて切々と綴られている。その副題から判ずるに、近親者や関係者のみに配られたものと思しいもので、泰輔と緑紅の人物が偲ばれる。なお、付言しておけば、泰輔と緑紅が撮影した古写真は現在、東京都江戸東京博物館にまとまって所蔵されていることは殆ど知られていない。近代の京都を広範に撮影対象としたものが多いだけに、その具体的な内容の精査に関しては今後の研究に期することとした。

緑紅叢書の第二十九輯として京を語る会より昭和三十五年（一九六〇）に刊行された『京のお正月』の稿本（二冊 個人蔵）〔図2〕を最後に掲出しておこう。近時見い出された新出の史料であり、その詳細が紹介されるのは本書が初めてと思われる。原稿用紙計八十枚にも渡る自筆原稿であり、各所に挿図用のモノクロ写真が逐一付されている。推敲の次第をみるに、緑紅の取材力の高さには一驚させられる。緑紅の研究姿勢には改めて見習うべき点が多い。

(Ⅱ) 杉浦丘園(一八七六—一九五八)

本名は杉浦利拳。通称は三郎兵衛。丘園は号である。三条柳馬場東入ルの富商、大黒屋を同家は代々営んだが、その十六代に当たる人物⁽¹⁾ということである。

先に記したように、丘園は稀代の収集家としても知られ、「私の蒐集したものは実に百般にわたっている。つまり何でも興味をひいたのであるから始末に悪い。在銘遺物・古瓦・看板・板木・鰐口・石塔・糸印・双六・絵馬・書籍・雑誌・新聞などをはじめとして、手当り次第に興味のある者を集めたのである⁽¹²⁾」と自ら記す通りである。彼の収集した祇園祭関連の史料は本書でも度々登場するが、その他の例としては、丘園収集の看板が大阪歴史博物館に現在所蔵される点を付記しておきたい。

昭和八年(一九三三)に刊行された『雲泉莊山誌 別冊第二 家藏祇園会に関する資料及文献』(以下『雲泉莊山誌』と略称)は近世祇園会の祭儀を研究する上で注視される史料である。その「はしがき」に「本書所載資料図書の一部の小展観を催し来覧の知友諸賢に此小冊子を呈す」と丘園は記す。そして、「売品でなく、知己に謹呈したもので、少数数しか作らなかつたので今手許には一部の余分もない⁽¹³⁾」という丘園の述懐も合わせて鑑みればわかるように、『雲泉莊山誌』は知人や関係者のみに配布されただけであり、現存数が実に少なく現在は稀観本となっている。丘園による祇園祭研究の到達点を示すことを思えば、丘園の研究成果へ接する機会を減じさせる結果となっており、このような現況は残念という他ない。かくいう筆者も数年前によりやく入手できたほどなのである。入手以前は必要となった際に、数少ない所蔵先の図書館に赴いては、この史料へその都度目を通していたわけである。

『雲泉莊山誌』には、祇園祭に関する丘園の収集品が逐一掲出されており、丘園による若干の解説が施されている。そこには、現在確認されていない史料も多数あるが、その解説文を読むに、近世以前の祇園会の実相を研

究する上で重要な史料と思しいものばかりである。わけでも特筆すべき点は山鉾巡行のみならず、神輿渡御や祇園ねりものに関する史料も多く含まれており、祇園祭の歴史を概観できる史料群であったことが窺い知られる。それだけに丘園の死後、彼の収集品の行方がかねがね気になっている所である。本書を契機にこれらの史料の再出現を期したい。それらの史料を精査することで、祇園祭研究の深化が一気に可能となるはずである。

続けて挙げるのは、丘園旧蔵の『祇園会ねり物復興記念帖』（二冊 個人蔵）である。昭和十一年（一九三六）に祇園ねりものが復興した際に刊行された一書で、いわば祇園ねりものの公式記録書とでもいうべき史料である。「祇園ねりもの篇」第八章でも大きく触れることとなる史料だが、この表紙右下隅に丘園の蔵書である旨を記した朱文二重長方印を捺す別紙が貼り付けられ、そこには「京都三条通／杉浦丘園／柳馬場東入」との文言が施されている。先に触れた『雲泉莊山誌』において、丘園が山鉾巡行だけでなく、祇園ねりものにも関心が高かった点を示したが、こういった丘園旧蔵書が眼前に現れるとやはりその一点が改めて再認識できるというものだ。

（Ⅲ）若原史明（一八九五～一九四九？）

若原は、戦前に刊行された雑誌『風俗研究』に祇園祭に関する論考を精力的に発表した人物である。彼の没後に遺族によりその成果がまとめられ、『祇園会山鉾大鑑』として八坂神社より昭和五十七年（一九八二）に刊行された。実に一五一四頁にも及ぶ大著だが、非売品だった点に加え、図書館や資料館などに同書が所蔵される施設が京都以外の地では少ないという難点を抱えている。古書市場では現在七万円程の高値で取引されていることを思えば、稀覯本とまずは位置付けてよい史料であろう。

残念ながら、『祇園会山鉾大鑑』は全ての山鉾に関して論じることなく、全二十九基（当時）の山鉾中、十九基への論究に留まり、未完に終わっている。彼の甥、若原英式による「若原史明の思い出」という一文が同書に

所収されるが、それによれば、「史明は、昭和二十四年の冬、ふらりと旅に出たまま、遂に不帰の客となったのである」といい、志半ばで客死したことが窺い知られる。『祇園会山鉾大鑑』の内容が未完に終わったのは極めて残念でならない。

なお、『祇園会山鉾大鑑』の稿本が残されており、その内訳は大学ノート計四十六冊に渡る大部である。それらは八坂神社に現在所蔵され、平成十一年（一九九九）に京都市指定・登録文化財に登録されるに至った。膨大な量に渡るノート各冊の奥付を鑑みるに、昭和四年（一九二九）から同二十三年（一九四八）にかけて脱稿されたようで、その内容を精査した結果、昭和二年（一九二七）頃より執筆が開始されたと考えられている。¹⁴文化財として価値が見い出された点はこの特記しておき、彼の大きな功績に敬意を払いたい。「昭和の『祇園会細記』」とでもいうべき集に示唆に富む内容である。

大正十五年（一九二六）七月に八坂神社より版行された「祇園会山鉾巡行順并ニ説明書」（一枚 個人蔵）には、祇園会の概要と歴史、そして各山鉾の解説が若原史明によって記されており、戦前において祇園祭の知識の普及に一役を買ったことが改めて窺い知られる。

（Ⅳ）松田元（一九〇八～九八）

『祇園祭細見 山鉾篇』¹⁵の著者といえは、思い出す人は多からう。同書は翌年五月に二版、その後三版が刊行されており、好評を博したことが窺える。細筆によるペン画や精緻な切り絵は観る者を祭礼の奥深い世界へと誘う。

島田崇志氏が代表を務めた「京のまつり研究会」により、松田元の描く切り絵や細密画が近年一冊に纏められており、¹⁶その巻末に松田元の略歴が記されている。それによれば、銀行員であった同氏は退職後の六十歳頃より

京都の祭礼や年中行事を取材し始めたという。「京都新聞」や『月刊京都』に自作の切り絵や細密画とともに祭礼や年中行事を紹介する画と文の両面を兼備した郷土史家であった。全国的にみても稀有な存在といえよう。

島田氏の計らいにより、松田元の描く大量の切り絵や細密画を近時拝見することができたが、その圧倒的な画力と豊かな表現力に一驚させられた。『祇園祭細見 山鉾篇』や『切り絵・細密画で楽しむ京のまつり・年中行事』に載る挿図をそれまで通覧していたため、自分なりには熟知していたとばかり思っていたが、それが思い込みであった点を痛感させられた。印刷物とは大きく異なる「本物の持つ凄み」を改めて思い知らされたのである。彼の手掛けた絵を一枚一枚眺めていると、あつという間に日が暮れてしまう。それほどに彼の描く切り絵や細密画の世界に深く没入していくのである。美術史のみならず、戦後京都の祭礼を考える上で民俗学的にも再評価を要する人物として、ここに大書して広く知らしめることとしたい。

以上掲出した四人に共通するのは、最初に触れたように在野の研究者であったことである。これが戦後の祇園祭研究において大きく災いした。「非アカデミック」というレッテルを四人に張りつけ、彼らの研究成果を顧み、正当な評価を付与する機会が失われていったのである。なるほど、史料の引用や使用方法などに難があるのは確かであろう。しかし、そのような点ばかりをあげつらい、成果の全てをばつさりと切り捨てた行為は褒められたものではなからう。四人の成果を「見て見ぬふり」した挙句、まるで自分で調べてきたかのように彼らの研究結果をこっそりと援用する研究者は実に多い。そういった行為はいかなるものか、といわざるを得ない。

ここに四人の履歴を示すことで、彼らの偉大な業績を簡略ながら顕彰しておくこととしたい。いずれも祇園祭研究に欠かせない先学である。なお、ここでは触れなかったが、もう一人挙げるとすれば、それは碓井小三郎（一八六五―一九二八）であろう。『京都坊目誌』の著者といえは思い出す人も多いのではないだろうか。彼の手

掛けた祇園祭に関する史料は本書の「山鉦巡行篇」第一章でも取り上げるが、先の四人と遜色のない丁寧かつ精緻な活動や的確な視点をもって祇園祭を調べ上げている点は合わせて記しておく。

三 本書における用語表記について

ここまで読んできて、読者は一つの疑問が湧いてきたのではないだろうか。そう、「祇園会」と「祇園祭」の表記の差異についてである。今でこそ、祇園祭と呼び習わされているが、近世以前においては度重なる疫病流行に伴い、その原因となった悪霊を慰撫鎮送する御霊会とされていた。そのため、「祇園会」と称していたと考えられている。なお、蛇足ながらいえ、そういった御霊信仰ではなく、頻発する地震が祇園会的主要原因とする保立氏の新説は先に触れた通りである。「祇園祭」と一般的に表記されるようになったのは近代以降の話である。

「祇園会」と「祇園祭」を使い分けるのか、それとも読み手が混乱しないよう、「祇園祭」で統一するのか、本書の書名に「祇園祭」という文言を使用しただけに不意に濫用したが、前者の通りに表記の使い分けを本書で行うこととした。なお、本書で扱う史料によつては「祇」や「祇」の字を用いる例もあるが、読み手の混乱を避けるために「祇」で統一した点も併せて触れておきたい。

続けて断っておきたい点は、八坂神社という社名の表記である。近世以前は「祇園社」や「感神院」の名で知られたが、八坂神社という現在の社名に変わったのは近代以降の話である。本書では近世以前と明治以降の両時代を網羅的に扱うため、読み手の混乱を避けるために「八坂神社」の名で統一した方がよいとも思ったが、研究者向けの論文集という性格上、近世以前は「祇園社」、近代以降は「八坂神社」と社名の表記を正確に使い分けることとした。

優れた論考¹⁷⁾があり、実に示唆に富む内容となっているが、本書では断りがない場合、基本的に「史料」の字を使用する方針とする。これは筆者のこだわりではなく、あくまでも便宜上の使用にすぎない点を付記しておく。なお、本書では「見る」と「観る」の文言を意図的に使い分けた。seeとwatchは同じ対象物を眺めるにも意味が全く異なる。漫然とみる行為と目的を持ってじっくりみる行為の違いは自明であろう。この使い分けに關してだけは筆者のこだわりによるものである。

史料引用における表記は基本的に旧仮名遣いを新字に改めたが、史料内の文意を尊重して旧仮名遣いのままに留めた箇所もある。なお、本書で扱う史料には筆者の所蔵品も含むが、全体の統一を図るために公的機関以外の所蔵先は「個人蔵」と表記した点を諒とされたい。

随分と前口上が長くなってしまった。それでは、描かれた祇園祭の悠久なる歴史に分け入り、その変遷を描かれた史料より巡る作業を進めていくこととしよう。

- (1) 保立道久『歴史のなかの大地動乱——奈良・平安の地震と天皇』岩波書店 二〇一二年 一四〇～一四五頁
- (2) 山路興造「祇園御霊会の芸能——馬長童・久世舞車・鞆鼓稚児——」(『藝能史研究』九十四号 一九八六年、後に同『京都 芸能と民俗の文化史』思文閣出版 二〇〇九年 に再録)
- (3) 河内将芳『中世京都の都市と宗教』思文閣出版 二〇〇六年
- (4) 河内将芳「祇園会山鉦圖取考——戦国時代から近世前期にかけて」(日次紀事研究会編『年中行事論叢——『日次紀事』からの出発』岩田書院 二〇一〇年、後に同『祇園祭の中世——室町・戦国期を中心に』思文閣出版 二〇一二年に再録)
- (5) 田中緑紅「祇園遷り物 (上)・(下)」(『京都』三卷二号、三卷三号 一九三六年)、同『祇園ねりもの』郷土趣味社 一九三六年、同『祇園祭ねりもの 上・下』京を語る会 一九六〇年

図」(一幅 城南宮蔵)⁽⁶⁾の存在をここで挙げておきたい。その作品で一恵が見立てた祭礼名と、現在の研究における祭礼名は大きく乖離しており、「祭礼図」という対象がはつきりしない名で表記する他ないというわけである。

それでは絵巻に目を移し、「年中行事絵巻」にみる祇園会の様子を探ることとしよう。巻頭は邸前で繰り広げられる田楽の光景である。続く場面では、巨大な吹き流しを持つ子ども〔図1〕、大きな笹枝や御幣を手にする子ども〔図2・4〕の姿が多く描かれている。これらの笹枝や御幣は依代と思われ、後の時代の山鉦へと繋がるものと考えられるが、笹枝を持つ子どもは、後述の「月次祭礼図」模本(六幅 東京国立博物館蔵)にもみられ、その後近世に入ると次第に数は減少の一途を辿り、描かれたとしても枝が小振りで簡便なものになっていく。十七世紀後半制作の「祇園祭礼図巻」(二巻 永青文庫蔵)あたりを境に徐々にその姿を消していったものと思しい。なお、福井県敦賀市の久豆彌神社の祭礼には、先に触れた「年中行事絵巻」模本にみられる大きな吹き流しと酷似したものが現在でも出されており〔図5〕、注視されよう。若狭は京都の祭礼の伝播を考える上で注視せねばならない地であるように思われてならない。

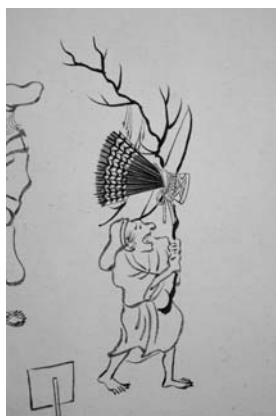


図3



図2



図1

図1～3 「年中行事絵巻」模本 部分 京都市立芸術大学芸術資料館蔵



図5 久豆彌神社 祭礼 垣東敏博氏提供



図4



図7



図6

図4・6・7 「年中行事絵巻」模本 部分 京都市立芸術大学芸術資料館蔵

「年中行事絵巻」模本を詳細に眺めて気付くこととして、駒形稚児が描かれている点に注目されよう（図6）。木製と思しき駒形を胸に据える姿は後世の祭儀にみる駒形稚児そのものに相違なく、駒形稚児の発生した時期を類推する大きな手掛かりとなる描写である。幾種も伝わる模本のいずれにもこの稚児の姿は描き出されており、近世の模写の段階で新たに描き加えられたものではない点は明らかである。駒形稚児に関する文献史料は乏しく、その発生と展開については想像を逞しくせざるを得ない難点を抱えるものの、少なくとも平安期には存在したことが「年中行事絵巻」模本から窺い知られる。なお、駒形稚児に関しては第三・四章で詳述することとしたい。

続けて目を惹くのは、馬上で大きく背を仰け反らせて田楽太鼓を打つ男の姿である（図7）。実に躍動感に満ちており、模写であることを忘れさせるほどの卓抜な描写が施され

ている。その傍らにはびんざさらを打ち鳴らす男が描かれている〔図8〕。びんざさらとは左右の両端を持ち、アコーディオンのように板を打ち合わせて音を出す楽器だが、ここでも先にみた田楽太鼓と同様、躍動感に充ち溢れた表現が看取できる。今にも音が聞こえてきそうだ。

その場面が続いて、三基の神輿が渡御する様子が大きく描かれており〔図9〕、牛車で駈けつけて見物に來た貴人の姿も確認される。神輿行列が渡御する傍らには、贅を尽くした風流造り物が多数描かれている。狂言『籤罪人』にみられた中世以前の祇園会の豊穠な世界が窺える点で、模本ながら貴重な作品である。

神輿行列の様子が仔細に描かれ、その祭列には神輿の他、劍鉾や田楽、獅子舞、王の舞、御幣、真神を持つ人々〔図10・11〕が表現されている。加えていえば、祭列見物に興じようと集まった群衆の姿も数多く描かれ、平安末期頃の祇園会の様子をこの絵巻より知ることができる。なお、数ある祭礼の中でもこの「年中行事絵巻」に祇園会が重点的に描かれているのは、後白河法皇の祭礼観によるものとされている⁸⁾。

以上簡略ながらみてきたが、「年中行事絵巻」模本は山鉾登場以前の祭儀を視覚的に知る唯一の手掛かりである。異本の存在も幾種類か確認されており、それらを総合的に把握するのは多大な労苦を伴うものの、「年中行事絵巻」模本の諸本の図様を整理し、それらの共通点や相違点、そしてその源流



図8



図9

図8・9 「年中行事絵巻」模本 部分 京都市立芸術大学芸術資料館蔵

天保三年壬辰夏諸父老相謀囑門人大角勤臨模之

且使余書顯其上庶幾足欽仰數百年前之威儀也

翌年癸巳夏裝成因千此記 東暉 紀廣成并外題

この文面によると、長刀鉾町が所蔵していた「祇園会古図」の破損が酷いため、天保三年（一八三二）に廣成が模写し、新たに制作しなおしたことがわかる。「已久壊裂不易見」と記されてあるように、原本は相当痛んでいたことが窺える。なお、この原本の現存は確認されていない。廣成の模写的な作品であるものの、画面左上端の悪王子社で長刀を拝戴する光景は、他の作例に見いだせない描写であり、中世祇園社の大政所の様子を窺い知る好例といえよう。

さて、ここで問題にすべき点は、原本の破損が相当あったにもかかわらず、廣成本はその面影すら微塵も感じさせないことである。例えば、冷泉為恭（一八二三～一八六四）は古画を数多く模写しているが、虫食いや欠損の箇所などは、原本の損傷状態まで正確に模写しようと努めている例が殆どである。廣成本は箱書がなければ、こういった特殊な経緯で制作された作品であるとはわからなかったであろう。廣成は新たに制作し直す際、おそらくは鉾町に伝わる伝承や文書類を参照しつつ、制作に臨



図6

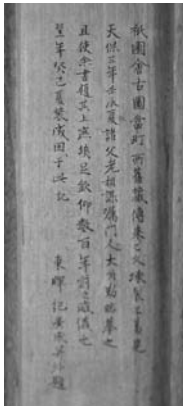


図7（箱書）

図6・7 紀廣成筆「祇園社大政所絵図」模本・箱書 長刀鉾保存会蔵



図8 「祇園社大政所絵図屏風」 部分 個人蔵



図9 紀廣成筆「祇園社大政所絵図」 模本
部分 長刀鉾保存会蔵

んだものと思われる。

祇園社の大政所を描く作品としては、「祇園社大政所絵図屏風」(二曲一隻 個人蔵 以下、個人蔵本と略称)⁽²⁶⁾が広く知られている。廣成本と個人蔵本の両作品ともに、画面中心から向かって右に少し構図の中心をずらし、鳥居を大きく配した画面構成が目を引く。「六道珍皇寺参詣曼荼羅図」(一幅 六道珍皇寺蔵)が境内を画面中央に大きく配して全体の安定を図ろうとする意識とは別趣である。また、門前の茶屋が建ち並び、多くの参詣者で賑わう様子を描く点も共通しており、廣成本と個人蔵本が密接な関係にあるものと判断してよいだろう。

廣成本と個人蔵本を詳細に比較した際に気付く点を以下に挙げよう。個人蔵本には、大政所の境内に全体を白く塗られた三つの山型の石らしきものが置かれてある〔図8〕。この詳細についてはこれまで判然としなかったが、廣成本で同じ箇所を見ると、三尊石であることがようやくわかるのである〔図9〕。廣成本の原本が確認されない現状においては、想像を逞しくするしかないのだが、両作品が深い関連性を示す点がわかった以上、廣成本の原本も個人蔵本のように、全体が白く塗られただけで処理されていた可能性は一概には否定できないだろう。

紀廣成が模写した過程を勘案すれば、神宮本においても、例えばうだつのある町家の例を出せば、傷みが激しい箇所は、模写する際に模写時当代の時世粧、新たに得た

情報を描き加えた可能性は皆無ではなからう。模写時の絵師の環境がいかなるものであったかに対して常に目を配るべきではないだろうか。

景観年代が即座に制作年代とはならないものの、鉾の曳手表現にみられるように、モチーフの新旧混在という問題も含めて、神宮本の美術史的な位置付けは今後の風俗画研究の大きな課題といえよう。先後関係に難があるモチーフをどのように解釈するのが、神宮本を理解する鍵となるであろう。

その問題を解くに当たっては、先に触れた模写はもちろん、粉本の利用や流派を越えた図様の共有を考えねばならないだろう。多少なりとも粉本を援用して制作された可能性は充分考えられるし、屏風のような大画面、なかでも風俗画の制作においては、もしそうであったとしても何ら不思議ではない。

そのように考える理由として、「月次風俗図屏風」(八曲一隻 東京国立博物館蔵)と「月次祭礼図」模本の図様に類似点を幾つか見いだせることが挙げられる。⁽²⁷⁾「月次風俗図屏風」は、やや土着的ともいえる描法が目立ち、狩野派や土佐派といった正系の絵師の作とはいい難いという。このように、流派を超えてモチーフが共有されていた事例もあり、神宮本の場合においても他派の古図を一部参考にして制作された可能性も大いにありうる。現代の我々が考える以上に、中世絵画の世界においては、モチーフ共有の自在性とでもいうべき豊穡な制作環境があったと推測される。

また、狩野派内においても、古画を参照して新たな風俗画が制作されたとおぼしき作品がみられ、神宮本の成立時期を考える上で参考になる事例がある。歴博乙本「洛中洛外図屏風」(六曲二双 国立歴史民俗博物館蔵)以下、歴博乙本と略称)はその発見以来、初期洛中洛外図の典型的な作例と目されてきた。しかしながら、近年は異論が出ており、狩野派の残した古図を参考にして狩野宗秀(一五五一―一六〇一)周辺で制作された桃山後期の擬古作である、と問題提起されている。⁽²⁸⁾

以上、風俗画における模写という行為について、取り留めのないままに縷々述べてきたが、一見してオリジナルとみえる図様でも粉本や古図を援用している場合が多く、神宮本について今後考える際にはこういった点に留意すべき必要性を確認できたように思われる。

六 祇園祭礼図研究の視界

山鉦巡行や神輿の祭列が大きく描かれており、文献では窺い知れない中世の豊穡な祇園会の有様が垣間みられる点では、神宮本は貴重な絵画史料といつてよい。中世祇園会の様子を大きく描く「月次祭礼図」模本ですら、神輿渡御の姿は描かれていないのである。歴博甲本や上杉本といった初期洛中洛外図には、その姿が描かれているものの、点景として小さく描かれるに留まっている。神輿渡御については、前述した二点の「祇園社大政所絵図」以外では、「年中行事絵巻」まで遡らなければ、その有様はわからないのである。そういった意味においては、神宮本の描写内容を今後精査していくことで、新たな中世の祇園会の全体像がみえてくるのではないだろうか。そういった持続的な作業に伴い、祇園祭礼図研究の視界は広がりを持つこととなるろう。

「月次祭礼図」模本の祇園会表現は俯瞰的ではなく、ほぼ真正面から山鉦が近接拡大されて大きく描かれている。この視点が神宮本と共通するのは興味深い。俯瞰的に町並みを描出する歴博甲本以降の都市風俗図とは一線を画している点は注目すべきであろう。特に「月次祭礼図」模本は、一く五月の景色は俯瞰的に描きながらも、六月の祇園会の箇所のみ真正面から大きく描かれており、他の月の行事や祭礼の表現とは全く異なっている。²⁹ 神宮本の図様成立を考える上でたいへん興味深い構図の共通性といえよう。

そのように考えるのが許されるのなら、祇園会を大きく扱う絵画史料に限っていえば、各作品の制作時期を勘案して時系列に並べてみると、「月次祭礼図」模本から神宮本へ、そしてサントリー本、出光本へと絵師の視

点が次第に高くなっていった、と考えればまさに合点がいく。神宮本をより俯瞰的に描くと、出光本の画面構成に近似する点は見逃せない。

『実隆公記』の「京中」を描く屏風が、どのような図様であったのかを神宮本は想像させるだけでなく、祇園祭礼図の祖型がいかなるものであったかを想像させる作品が出現したといえるのではないだろうか。

洛中洛外図の一部分を近接拡大して、阿国歌舞伎図や四条河原遊楽図、豊国祭礼図など新たな時世粧を単独で描く画題が生まれていったのは事実である。しかしながら、祇園祭礼図の場合でいえば、祇園会そのものは平安期から挙行され続けており、平安期の「年中行事絵巻」巻九に早々と一巻単独の画題で描かれているのである。近世初期に初めて登場した事象を絵画化したものと同一線上で論じるのはいかがなものだろうか。

祇園祭礼図が洛中洛外図から派生していったのではなく、洛中洛外図屏風の成立以前に祇園祭礼図屏風が存在していたと考えるのはごく自然なことだと思われる。神宮本は、そういった中世の祇園会を単独で描く絵画作品の有様を窺い知る点において、甚だ稀少な作品といえるだろう。

京都という町が復興するに従って、俯瞰的に町そのものを描き出そうとする構図が次第に整えられていったのではないだろうか。そういった時代の潮流のもとに洛中洛外図という新たな画題は成立していったと考えるのはあながち間違いはなからう。むしろ、洛中洛外図屏風の誕生には、これまで指摘されている通り、「月次風俗図扇面流図屏風」(六曲一隻 光円寺藏)や「洛中洛外図帖」(一帖 奈良県立美術館藏)のような祭礼や年中行事を描く元信印を伴う扇面画や画帖にも注意を払わねばならないのはいうまでもない。しかしながら、まずは祇園会を描く屏風からの影響を大きく受けた点を念頭に入れる必要があるだろう。

なお、神宮本の原本の正確な制作時期を特定するには、今後の各分野からの詳しい研究を俟つかないが、管見では十六世紀前半、つまりは祇園会が応仁の乱からようやく再興した時期にまで遡る可能性を指摘しておきた

い。これは、『実隆公記』の「画京中」からさほど隔たりのない時期に相当する。ただし、『実隆公記』の屏風は「土佐刑部大輔」と記されてあるように、土佐光信の作品であることは疑いない。前述したように、神宮本の原本は狩野派と思われるため、「画京中」の屏風とは別の作品であろう。

となれば、正信（一四三四～一五三〇）や元信（一四七六～一五五九）の周辺でこういった祭礼図屏風が制作されていたことが窺われて実に興味深い事例となり、初期狩野派の画域の広さを示しているといえよう。扇面画や画帖といった小画面とはいえ、祭礼や年中行事を数多く描く作品を元信工房が手がけていた点を勘案すれば、神宮本のような祭礼図屏風の大作を初期狩野派が制作していたとしても何ら不思議なことではない。

風俗画の担い手は室町幕府の衰退に伴い、土佐派から狩野派へと移っていくと考えられている。狩野派が土佐派の作品を学習し、そして模倣した結果、神宮本のような屏風の大作を制作したのであろう。

室町後期の狩野派は、土佐派の絵師と積極的に交流し、それを越えようと貪欲にその画風や図様を自派に取り込もうとしていたふしがある。⁽³¹⁾ そういった画壇背景を考えれば、土佐光信の描いた「京中」を描いた屏風の図様を始め、土佐派の祭礼絵巻の古画を学習し、それらを模倣して新たな絵画を作り出していった可能性は大いにあろう。神宮本の図様構成は、そういった片鱗を物語っているのかもしれない。モチーフの新旧混在は、こういった所に由縁するのであろうか。神宮本は、狩野派画人の風俗画の新しい傾向を示した作品と位置付けることも可能かもしれない。洛外から洛中へと絵師の関心が推移し始めた時期にも近く、その頃の中央画壇の動向を推測するに余りある作例でもある。⁽³²⁾

おわりに

模本ではありながらも、神宮本が極めて史料的な価値に富んでいるのは、その原本の制作年代が少なくとも十

六世紀前半にまで遡りうること、またその描写内容が他例にみられないものが多いことである。祇園会が中世から近世へと展開する際の様相を伝える遺例として、神宮本の価値は非常に高いものといえる。⁽³³⁾

神宮本は『実隆公記』の「京中」を描く屏風がどういった図様であったのかを推測する大きな手掛かりとなるであろう。おそらくは、「月次祭礼図」模本の祇園会表現を抽出し、大画面に展開したものが、神宮本のような作品であったのではないだろうか。原本の存在が確認できない現状においては、想像を逞しくしただけで憶測の域を出ないものの、両作品の原本が歴博甲本に先行し、祭礼表現が中核主題として大きく扱われている以上、祇園会を主題とする屏風が制作される下地は、歴博甲本の誕生以前に整っていたとみる他ないだろう。神宮本の出現はそういった推測を後押しできるものと管見では考えている。いわば、近世初期風俗画の発端を、神宮本に窺い知ることができるともいえるのではないだろうか。

美術史のみならず、芸能史や文化史、宗教史、都市史など様々な分野からのアプローチが神宮本へ今後なされることを祈念している。そういった研究の積み重ねにより、中世京都の諸相について新たな視界が開けるのではないだろうか。本稿がその足掛かりとなればこれ以上幸いなことはない。

なにごん、歴博甲本以前の時期の中世京都がいかなる様相を示す都市の姿であったかは、絵画史料に乏しいため、歴博甲本の描写内容のみに頼らねばならないのが現状である。そこには、歴博甲本の描写内容が正しいか否かの議論は殆どなされてこなかった。このように、隔靴搔痒といった感ではあったが、比較材料がなかったために仕方のないことであり、神宮本の出現によって比較検討する作業がようやく可能になったといえる。その作業過程においては、歴博甲本の景観描写について考え直す余地が浮上する可能性も大いにあることだろう。中世京都の祇園会を視覚的に捉え直し、再考するに当たって、その裾野が広がった点は有意義といえる。

- (1) 請求記号(特殊本 一門 4867) 神宮司庁編『和書絵目録——神宮文庫所蔵』戎光祥出版 二〇〇五年 二六二頁

なお、神宮文庫の所蔵作品は、貴重書(国宝や重要文化財など)、特殊本(絵巻など)、一般書の三つに分類されており、貴重書と特殊本の閲覧は事前予約が必要である。神宮本は特殊本に分類されている。

- (2) 武田恒夫「概説」(京都国立博物館編『洛中洛外図』角川書店 一九六六年)、同『日本の美術 二十 近世初期風俗画』至文堂 一九六七年

- (3) なお、本稿における神宮本の位置付け作業の結果、近時拙稿にて開陳した論を修正せねばならない点が幾つかあったことを付記しておきたい。拙稿執筆時には神宮本は未見であったことが大きな要因である。拙稿「祇園祭礼図の系譜と特質」(植木行宣・田井竜一編『祇園囃子の源流——風流拍子物・鞆鼓稚児舞・シャギリ』岩田書院 二〇一〇年)

- (4) 拙稿「京都国立博物館蔵「祇園祭礼図屏風」の史的位置」(『美術史』一五四冊 二〇〇三年)

- (5) なお、本稿執筆に当たり、神宮文庫より二枚のみの図版掲載が許可された。本来ならば、作品紹介という本稿の性格上、精細な部分図版を多く用いて、作品の位置付けを試みたいところではあるが、その旨を諒とされたい。

- (6) 泉万里「風俗画の中世——月次祭礼図模本(東京国立博物館蔵)について」(『國華』一二三〇号 一九九八年)

- (7) 土居次義「祇園会図に就いて」(土居次義『日本近世絵画攷』桑名文星堂 一九四四年)、武田恒夫ほか編『日本屏風絵集成 十三 風俗画 祭礼・歌舞伎』講談社 一九七八年、赤井達郎・中島純司編『近世風俗図譜 八 祭礼(一)』小学館 一九八二年

- (8) 「年中行事絵巻」については以下の論考を参照されたい。小松茂美編『日本の絵巻 八 年中行事絵巻』中央公論社 一九八七年、滋賀県立近代美術館『月次絵——十二月の風物詩』展図録 一九九五年、國賀由美子「祭礼図の系譜に関する基礎的研究」(『鹿島美術研究』年報別冊二十号 二〇〇三年)

- (9) 拙稿前掲註(3) および拙稿前掲註(4) 論考参照

- (10) 神宮文庫や紀州藩藩校については以下の論考に詳しい。『神宮文庫図書解題 一 神宮文庫沿革資料』神宮司庁 一九三四年、松下忠「紀州藩文庫について」(和歌山大学附属図書館真砂町分館編『紀州藩文庫目録——和歌山大学附属

第一章 もう一つの祇園祭〈祇園ねりもの 近世篇〉

一 「大坂京都名物合見立」——摺物が語るねりもの——



図1 「大坂京都名物合見立」個人蔵

ここに一枚の摺物がある〔図1〕。二十二・一×十六・三センチと実に小さなものである。摺物の最上部に「大坂京都名物合見立」と記されており、これが作品名とわかる。行事や羽二重、勧進元などが書かれた中央の「柱」を挟み、向かって右半分の「東方」に大坂の名物を、そして向かって左半分の「西方」に京都の名物を列

挙している。その数は東方の大坂側が六十三、西方の京都側も同じく六十三、計一二六もの名物が小さな摺物にびっしりと記される。つまり、この摺物は大坂と京都の両都市の名物を相撲の番附に模した見立番附というわけである。

版行された時期は詳らかでないが、天保から嘉永年間の頃を想定してひとまず問題なからう。塩屋喜兵衛の出版によるもので、この人物は大坂心斎橋の博労町に店を構えた書肆兼草紙屋である。後に塩屋から河内屋に屋号

だけ需要の多かったことが窺われる。

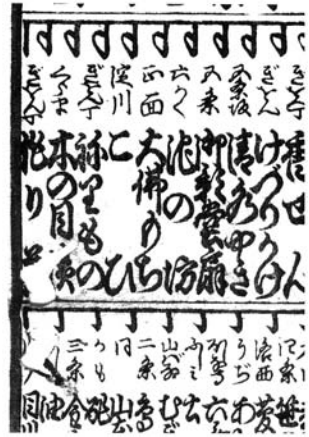


図2 「大坂京都名物合見立」部
分 個人蔵

を変え、河内平七の名で活動するようになるが、その改名後に「大坂京都名物合見立」は、他の多数の摺物と合わせ一括して冊子化され、『浪花みやげ』の名で改めて広く売り出された。

なお、この『浪花みやげ』は国立国会図書館や大阪市立中央図書館、大阪府立中之島図書館などに所蔵されているが、これらのうち、収載された摺物に若干の異同があることが報告されている⁽¹⁾。版を重ねて数度に渡り出版されたものと思われ、それ

「大坂京都名物合見立」は先に触れた通り、大坂と京都の名物を文字通り相撲の番附に模したもので、これと選定基準の現代との違いに驚いていると、時間がみるみる流れてしまう。相撲の番附に倣っているとはいえ、好角家でなくともこの摺物はみているだけでも楽しい。いいじゃないか、幕末の大坂や京都の名物に思いを馳せ、東の間の夢に浸る。摺物とともに時間旅行ができること請け合いである。行けるものならば、この時代の大坂や京都へ行ってみたい、と思わせるだけでも、この摺物は十分に価値がある。

枕がどうも長すぎたようだ。そろそろ本題に入るとしよう。それではこの摺物の詳細についてみていきたい。

「住吉 汐干」と「ぎをん 山鉾」が両都市の筆頭大関である。以下関脇に「今宮 十日戎」「ふしみ 初午市」、そして小結に「こうらいばし」とらや饅頭」「からす丸 道喜粽」と続く。このように両都市の名物が並ぶのだが、番付が下位になるに従い、文字も小さく記されるようになっていく。それを逐一読むだけでも一苦勞なのだが、それにめげずその後も順々に目をやると、西二段目十三枚目に「ぎをん町 ねりもの」(図2)とあること

に気付く。ちなみに、これに対応する大坂側は「いなり みこしたいこ」であり、玉造稲荷神社の祭礼を指すものである。

さて、この「ぎをん町 ねりもの」とは一体何を指すのであろうか。次に詳しく紐解いていくこととしよう。

二 近世の祭礼にみるねりもの

この摺物を理解するには、「ねりもの」についてまずは触れておく必要がある。試みに手元の『角川古語大辞典』⁽²⁾で「ねりもの」を引くと、

ねりもの【遼物・練物】祭礼の際、町内を練り歩く行列。趣向を凝らした扮装をしたり、^{つくりかた}作物を出したりする。

と記されてある。文字通りそのまま解釈し、山鉾や山車などの祭列、あるいはそれらに随行する祭礼行列の姿を想像すれば大きな間違いではなからう。なお、「作物」とは祭礼の際に仮設で拵えた人工的な造形物のことを指し、「造り物」や「つくりもの」などと表記する場合もある。⁽³⁾

なお、「ねりもの」という表記についてだが、「遼」の字を使用すべきと声高に主張する論者⁽⁴⁾もおり、その主張はわからなくもない。しかし、現在ではこの字が一般的ではない点を鑑みるとともに、祇園ねりもの研究の先学、田中緑紅の著作に敬意を払い、本書では「ねりもの」の表記を用いることとしたい。ただし、史料や論考の引用の際はその限りでない。

ついで江戸期の絵画や文学を紐解き、実際にそこで使用されているねりものの語例を確認したい。この作業を行うことによって、近世祭礼におけるねりものへの想像力が掻き立てられるというものである。

洛中洛外図や祇園祭礼図は近世を通じて数多く描かれ、祇園会の姿が何らかの形で活写されている。そこには

ねりもの行列が描かれている例が多く、近世祇園会の実相を知るうえで不可欠な史料となっている。

例えば慶長期の狩野派による「祇園祭礼図屏風」(六曲一双 出光美術館蔵)には、母衣武者や南蛮仮装の姿をした人々の行列が描かれており、背中の大きな母衣は実に色鮮やかで眩しく、祭礼に華を添えている様子が窺われる。また「祇園祭礼図屏風」(六曲一双 京都国立博物館蔵⁽⁵⁾)は寛永期前半の作として知られ、四八四一人もの大多数の人物が描き込まれている。注目すべきは左隻第三扇目の「これより町屋のねりもの」と書かれた貼札である。そこには揃いの華麗な衣装に身を包み、笹や扇を手にした女性の列が延々と描かれており、実に壮麗なねりものであったことが窺われる。「町屋」とわざわざ記されるあたり、山鉾町から出されたねりものとみてよく、上層町衆の経済力の豊かさが垣間見られよう。

江戸の祭礼を描く絵画にも目を移してみたい。「江戸天下祭図屏風」(六曲一双 個人蔵⁽⁶⁾)は、明暦の大火以前に遡るごく初期の山王祭を描く作品である。画面全体に酷いヤケが目立つものの、各町から出された風流ねりものが数多く描かれている点がこの作品の大きな特徴となっている。江戸城内をねり歩くことが許されたため、天祭の異称を持った山王祭の規模の大きさが窺い知られる。

「神田明神御祭礼御用御雇祭絵巻」(六巻 国立国会図書館蔵⁽⁷⁾)にも触れておかねばならない。文政八年(一八二五)の神田祭の御雇祭を描く絵巻で歌川派の絵師の手による作品である。山車(近世における表記は「出し」)のねりものが六巻もの大部の絵巻に描き出されており、江戸後期には実に華麗な祭儀となっていたことがこの絵巻から確認できる。

その他の祭礼でいえば、賀茂祭や住吉祭、春日若宮おん祭、さらには長崎くんちや八代妙見祭、そして各地の東照宮などの祭礼を描く絵巻や屏風にもねりもの行列がみられる。京都や江戸だけでなく、近世祭礼におけるねりものの裾野は全国的に広がっていたことが窺えよう。

それでは続いて近世文学にみるねりものの語例をみたい。明暦二年（一六五六）刊の貞室（一六一〇）七三『玉海集』巻第二 夏之部⁽⁸⁾に、

まつりのねりものをみて

摂州大坂梶山氏

手にさけてねるはたか子そ奈良団扇

保友

とある他、井原西鶴（一六四二）九三『好色一代男』巻五⁽⁹⁾に、

世之介も今は堪忍ならず、表へ出れば、「京より結構なるいせ参りがあるは」と、門立ちさわぎ、練物をみるごとくぞかし。

とあり、俳諧や浮世草子に取り上げられるあたり、近世に生きる人々にとってねりものが身近な存在で馴染みの深いものであったことが窺い知られる。以上の確認より、近世におけるねりものの基本情報はこれで理解できたものと思われる。

三 橘日泉筆「祇園祭礼風俗図巻」にみる神輿洗とお迎提灯

いうまでもないが、祇園は京都のみならず日本を代表する花街である。その歴史を紐解けば、寛文十年（一六七〇）の鴨川堤大改修により、鴨東の外六町（弁財天町・常盤町・二十一軒町・中之町・川端町・宮川筋一丁目）が開かれ、四条河原町周辺が発展した。その後正徳三年（一七二三）から内六町（元吉町・末吉町・清本町・富永町・橋本町・林下町）が造成されて祇園社周辺に茶屋や旅籠屋が立ち並ぶようになり、花街としての祇園が整えられていく。⁽¹⁰⁾享和二年（一八〇二）刊の曲亭馬琴（一七六七）一八四八『鞆旅漫録』に「京師の妓院」として、内外六町の町名が数々列記されており、祇園花街の盛観ぶりが窺い知られよう。なお、花街は「はなまち」と読まれる機会が多いが、本来の読み方は「かがい」である。

今も歴史が息づくこの街についてとりわけ詳しくとも、先に掲出した「ぎをん町 ねりもの」という言葉を聞いて、多くの人は何を思い浮かべるだろう。その答えは祇園社から奉仕される神輿に関わる行事と深く関係している。

(I) 神輿洗

祇園祭の神輿を鴨川の水で清める儀式がある。神輿の神幸と還幸の前後の日、つまり七月十・二十八日（近世以前は旧暦の五月晦日と六月十八日）と二度行われた。この行事を神輿洗という。現在ではあまり知られていない行事であるように思われるが、『曾良日記』の元禄四年（一六九二）五月二十九日条に、

及暮、御輿洗見ニ祇園へ趣。

と記されており、松尾芭蕉（一六四四～九四）が曾良（一六四九～一七一〇）らとともに見物した行事である。

江戸期の神輿洗については、曲亭馬琴編纂、藍亭青藍（生没年不詳）後補の『増補俳諧歳時記栞草』に詳しい。⁽¹²⁾ここに当該箇所を引用してみよう（傍線部筆者）。なお、本書の刊行は馬琴没後の嘉永四年（一八五二）のことである。

祇園の神輿洗 晦日「紀事」五月晦日、祇園の社に詣で、各杉の葉を受けて火災を祓ふを茅祓といふ。夜に入て神輿洗あり。凡其式、神輿三基、所謂素戔鳴命、大政所と号す。西は稲田姫、少将井と号す。東は龍王女、今御前と号。大政所・今御前の神輿二基は神輿屋を出し、直に拝殿に入る。少将井の神輿一基は、神輿屋より南門を出て石の鳥居より松林をすぎ、祇園町より目病の地藏堂の前を過り、鴨川の辺に臨みて、いひしへ河水に神輿を濯てこれを洗ふ。これを神輿洗ひといふ。今その義なしといへども、旧きによりてこれを称す。しかして後、再び祇園町より西楼門に入り、二基の神輿と共に拝殿に安置す。其供奉四条芝居の役者、

竿の先に提灯を張、外面に各姓名をしるし、高く是を挙ぐ。祇園の町々も家毎に高く提灯を張る。又六月十四日、祭礼終りて後、神輿三基、社頭に在す。同く十八日の夜、二基の神輿は直に神輿屋に入れ、少将井の神輿は今夜の式の如し。凡神輿三基、黄衣の法師三人、各常に、これを預りて主宰す。

長い文章で恐縮だが、幕末の史料とはいえ平易な内容のため、この記述より神輿洗の概要について理解できたことと思われる。三基の神輿のうち少将井のみが鴨川で神輿洗の儀式を行うのは現在も同じである。

寛文二年（一六六二）刊の中川喜雲（一六三六―一七〇五）『案内者』¹³卷三をみるに、十七世紀半ばには神輿洗という行事は既に存在していたようである。以下にそのことを示す箇所を引用してみたい。

祇園神輿洗 小の月には廿九日の夜也、少将井の御こし一社を四条川原の中島にまつりすへて、御昇丁ののども川水に御祓する也。松明ともしつれて警固の者あり、祇園町三所に大篝あり、御こしをまつる拍子の声に、「えうさいてうさい」といふ事、建仁寺の開山栄西和尚の奇特にて、建仁寺をたつる時に栄西々々といひければ、材木の大きなもろく〜と飛がごとくに行けるゆへに、今も重き物昇時には栄西超西といふといへり、これ不会の俗説也、やうさいちやうさいは神事の時のこと葉也、さいあれ〜、さち物はさいあれといふもおなじく、神事のこと葉なり、神秘につきてある事也、いふまじきことなれど、今の世の人のしらであやまりけるゆへに、爰にしるしてしらしむる也。物の用にもた、ぬ事と思はんは、放逸の人の心なるべし、これをしらば神事祭礼の心いれたうとかるべき事也、二本に生れて日本のこと葉をだにとりうしなひてしらざらん、いと口おし。まづさいあれ〜さちおなじくさいはひといふこと葉なり、神をまつりて幸あれ〜と祝こと葉也、式三番叟のおうさい〜といへるにおなじ、さちは仕合の幸也、火々出見尊は山に幸ありと神代巻に書たり。やうさいちやうさいも、やうとちやうとは助語也、たゞさいといはんがためなり。建仁寺は中古鎌倉の泰時の時分に立たり、祇園は貞観年中にまつり初し、はる〜後のことばを、以前よりあ

る神事にいはん事おぼつかなし、猶神道に付てふかき儀あり、こゝにしるすべからず。

この文の中で興味深いのは神輿の掛け声である。祇園に程近い地へ建仁寺を創建した榮西禪師（一二四一―一二一五）を引き合いに出すあたり、その土地に早くから根ざした行事であつたといえよう。ちなみに、「今も重き物昇時には榮西超西といふといへり、これ不会の俗説也」とあるが、これに関しては以下に挙げる文をみていただきたい。

建仁寺をすぐる。至て広大なる地中にて、寺院も多くあり。名所の所多し。且榮西のひきあげたる鐘あり。世に重きものをあぐる時、「榮西く」といふはその時かけ音せし残とぞ。

（清河八郎『西遊草』巻六 安政二年六月九日条）¹⁴

この「榮西のひきあげたる鐘」とは、『都林泉名勝図会』によれば、「榮西禪師はむかし河原院の覺鐘鴨川に沈みありしを惜しみ給ひ、人夫を聚めて引き上げさせ」たものであるという。江戸期の京都ではこのような俗説が人口に膾炙していたことがわかる。

最後に池大雅（一七二三―一七六六）の神輿洗にまつわる逸話に触れておきたい。伴蒿蹊^{ばんこうけい}（一七三三―一八〇六）により、寛政二年（一七九〇）に刊行された『近世畸人伝』巻四¹⁵を引用しよう。

又、江戸に下たる時、某候の邸にしる人有てやどりす。六月十八日になりて、けふは古郷祇園の社の御輿洗の神事也。いでそれを学んとて、とみに紙もて偶人を作り、火ともし、はやしものして邸の内をめぐらんとするとき、其候の世子みたまはん、先もて参れとの使有けれど、囃物に紛らはし、聞ぬさまにてかしこゝに行めぐりし時、などもて参らぬとむつがりて、使たびく^くに及びしに、今参らんといふ時、其偶人を焼うしなひ、こはあやまちし侍り、されどこれは祇園の御神に奉る志なれば、又人に見せ奉らんことを、神のほりし給はぬなるべしといひしかば、にくみて速に邸をいだされたり。げにさもこそとてわらひつ。

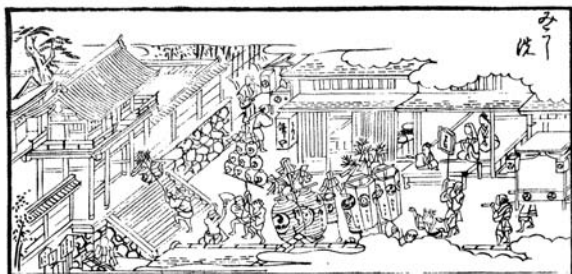


図3 『祇園会細記』部分 個人蔵

ちなみに、『近世畸人伝』にみる大雅の逸話を項目ごとに掲出し、一卷に集録した「大雅逸事図巻」(一卷 個人蔵)を富岡鉄斎(一八三六～一九二四)が制作しており、この神輿洗の逸話もその絵巻の中で取り上げられ、絵画化されている。なお、鉄斎の絵巻では、神輿洗にもかかわらず、鉦の模型で遊ぶ子どもがこの場面に描かれており、こういった変更がいかなる理由によるものかは今後検討の余地があるだろう。この絵巻が近代における池大雅研究の先駆的存在として注目されるだけに、そのような改変が気になるのである。

(Ⅱ) お迎提灯

先に掲出した『増補俳諧歳時記葉草』の記述で重要なのは、傍線を施した箇所である。鴨川の水で清めるために神社を出発した神輿を迎えるため、竿の先につけた提灯を役者衆が掲げて神輿に供奉してねり歩いたことがわかる。しかもその提灯には姓名が記されていたという。それに加え、祇園を始めとする周辺の町々も提灯を掲げて神輿を迎えたことが理解できる。

これはお迎提灯と呼ばれる行事である。お迎提灯の様子は、元禄十七年(一七〇四)刊『宝永花洛細見図』六之巻や宝暦七年(一七五七)刊『祇園会細記』(図3)に挿図が載り、その概要は広く知られている。

享和二年(一八〇二)十二月求板の『都祇園会図絵』(一冊 大阪府立中之島図書館蔵)には、「五月晦日ぎをんみこしあらひの図」と銘打った挿図(図4)が載り注目される。見開きの頁を広く活かして神輿洗とお迎え提灯の世界が説明文とともに見事に活写されている。提灯には「建仁寺町通」や「なはて(縄手)」

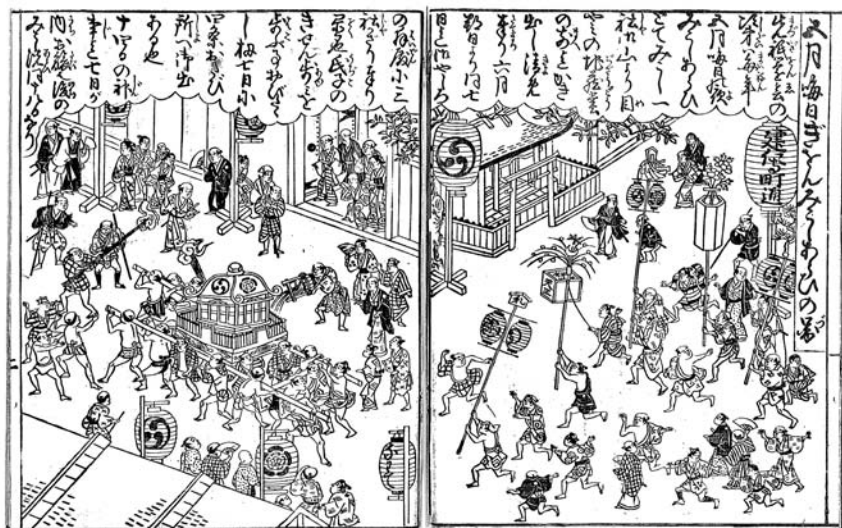


図4 『都祇園会図絵』部分 大阪府立中之島図書館蔵

の文字がみられ、天空に高く伸びる高張提灯を手に楽しげに歩むお迎え提灯の様子、そして松明の明かりのもと、暗がりの中を神輿の進む様子が描かれている。

また、延宝四年（一六七六）序の黒川道祐（一六二三～九一）『日次紀事』に

其供奉四條芝居役者竿頭張、提灯外面記各々姓名高挙之意気揚々然神輿往来其行也。如飛祇園町家々毎戸高張提灯諸人翠集而不漏寸地

と紹介されており、お迎え提灯は少なくとも十七世紀後半には既にあった行事とわかる。

（Ⅲ）橘日泉筆「祇園祭礼風俗図巻」の世界

神輿洗とお迎え提灯の様子を更に深く知る絶好の作品がある。ここに紹介したい。それは橘日泉（生没年不詳）筆「祇園祭礼風俗図巻」（一卷 国立歴史民俗博物館蔵）である。あくの強い顔貌表現が市井の人々の人間味を引き出すことに見事に成功している。祇園井特（一七五六～？）の顔貌表現を想起させ、井特の強い影響下にある点が窺い知られる。本図の絵師の人物像は詳らか



図6



図5



図8



図7

図5～8 「祇園祭礼風俗図巻」部分 国立歴史民俗博物館蔵

でないものの、十九世紀に生きた絵師とまずは考えて大きな間違いではなからう。

それでは本図を眺めていこう。神輿を鴨川の水で清めるため、祇園社から鴨川までに至る道中の様子を綴った絵巻〔図5〕で、神輿に供奉するお迎提灯の描写〔図6〕はとりわけ秀逸である。その描写を仔細に眺めれば、提灯を張る竿先には「蟬螂」や「瓢箪から駒」などのつくりものもみられる〔図7〕。その一つには「山田甚八」といった姓名が記されており〔図8〕、『増補俳諧歳時記葉草』の記述の正しさを裏付ける画証となっている。

『宝永花洛細見図』や『祇園会細記』、『都祇園会図絵』は版本ゆえ、行列の一部をトリミングした挿図にすぎず、彩色も施されていないためにお迎提灯を断片的にしか把握できなかった。それに比して、この絵巻の素晴らしい点は、作品の軸となる神輿洗とお迎提灯を丁寧かつ繊細に描きつつ、それを取り巻く市井の人々の日常

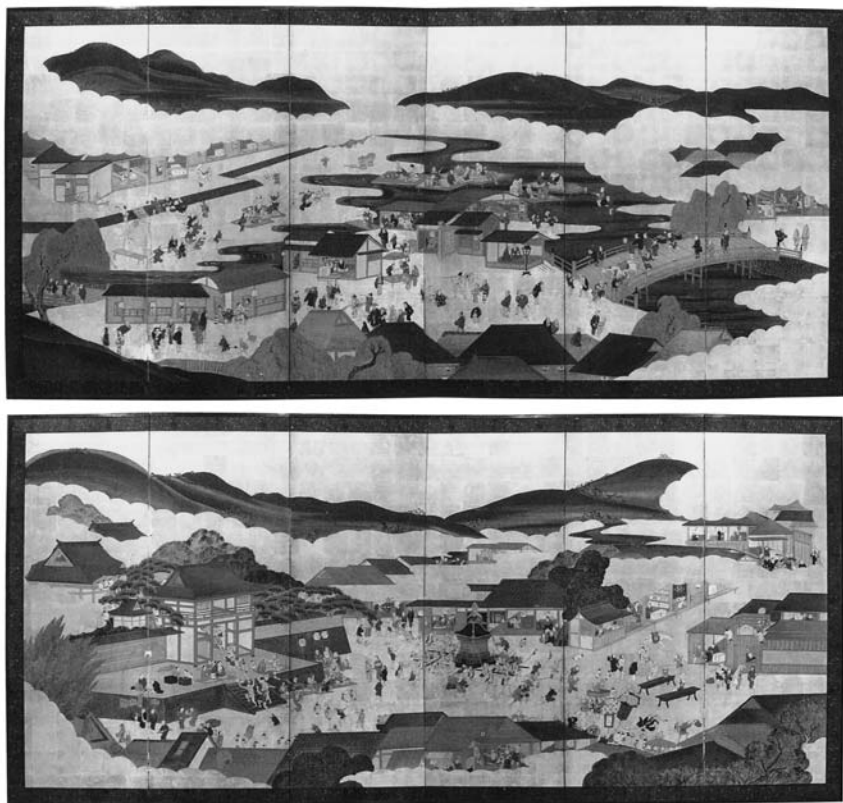


図9 「神輿洗お迎え提灯・四条河原納涼図屏風」個人蔵



図10 「神輿洗お迎え提灯・四条河原納涼図屏風」部分 個人蔵



図11 森寛斎筆「祭礼図」個人蔵

も描き込むことで見応えのある作品として成立させている所にある。行列を取り巻く環境もきちんと描かれており、神輿洗とお迎提灯を総体的に理解できる点は大きな特徴といえよう。神輿洗とお迎提灯が密接な関係であった点をこの絵巻から理解していただけたものと思われる。

橘日泉の絵巻と深い関連を有する屏風に近時寓目したので、ここに記しておこう。「神輿洗お迎え提灯・四条河原納涼図屏風」(六曲一双 個人蔵)〔図9〕とひとまず名付けておく。神輿洗とお迎え提灯、四条河原納涼を一双に描き分けた作品である。この屏風の画風を鑑みるに、幾分緻密さを欠く形式化の目立つ点があることは否めない。そのため、橘日泉の絵巻より制作時期は若干下がるものと思われるが、注目すべきは、橘日泉の絵巻で使用された瓢箪から駒や僧侶のモチーフがこの屏風にも転用されている点である〔図10〕。橘日泉が使用したモチーフがオリジナルなものかは

今後の研究課題ではあるが、興味深い転用例といえよう。

また、お迎え提灯を描く肉筆画も近時知り得たので紹介しておきたい。森寛斎(一八一四〜九四)筆「祭礼図」(一幅 個人蔵)〔図11〕がそれである。筆者名が明らかであり、お迎え提灯の歴史を辿る際に重要な指標となるため、本図はこの上なく貴重な史料である。管見の限りでは、平成二十七年(二〇一五)秋に和泉市久保惣記念美術館で開催された「笑いかたち——絵が笑う絵で笑う」で初めて展示された作品である。同展図録では「本図の図様からは祭りの名称が判然としない。画面右には木瓜文や三巴文をあしらった衣服を身につけた集団が踊っている」とし、「衣裳の木瓜文は、八坂神社の神紋であるため、八坂神社に關係する祭りの様子の可能性がある」との解説が施されたが、橘日泉の絵巻と比較するに、森寛斎の描く「祭礼図」がお迎え

提灯を描く作品とみて大過あるまい。今後は「お迎え提灯図」と作品名を改める必要があるように思われる。

先に挙げた「笑いのかたち」展での解説は、祇園ねりもの研究が一般的とはいえない現状において無理からぬことであろう。責められることではない。こういった立場に置かれ続け、正しい画題の判断が施されず、放置され続けている作品は多いのではないか。それを一点一点、折に触れて見つけ出しては修正を施していくしかない。先は随分と長い、そういった地道な作業が今後必要であろう。

四 芸妓のねりもの——芸妓が踊り、舞う祇園の街角——

実のところ、神輿洗に伴うねりもの行列はお迎え提灯だけではない。もう一つねりものが行われていた。ここで話題にするのはこのねりものである。随分と前口上が長くなってしまったが、今まで触れてきた事柄は以下に論じようと試みるねりものを知るうえで大前提となるので、その点をまずはご理解いただきたい。

それでは早速、この二つ目のねりものについて実に簡潔に記された史料を紹介したい。喜田川守貞（一八一〇—？）『守貞謄稿』卷之二十七にみる次の文章を引用してみよう。⁽¹⁸⁾

また祇園町の妓女ども種々に扮し、其所を廻り踊る。これを煉物と云ひ、衣服等善美を尽くし、晴雨を扱はず地上に裾をひき往くなり。これ一個の美観なり。けだし神輿には供奉せず。

つまり、神輿洗に合わせて、祇園の芸妓が華麗な仮装に身を包み、花街をねり歩いたというわけである。しかもねり歩く道すがら、鼃肩筋の旦那衆に声を掛けられた芸妓はその場で立ち止まり、舞や踊を披露したとも伝わるから、その華麗さには「驚させられる」これを所望といい、その数が増えれば、それだけ舞や踊の回数が増すわけであり、ねりもの行列はその度に一旦中断せざるをえなかった。ねりものが終わるのに明け方になることも少なくなかったという。その有様は「これ一個の美観なり」と記されるあたり、実に壮麗な様子であったこと

あとがき

無鉄砲な本だと思う。何しろ、悠久の歴史を有する祇園祭についてその描かれた姿を中世以前から戦後まで一書で辿ろうとするのだから、無謀な試みという誹りも聞こえてきそうだ。しかも美術史のみならず、民俗学や芸能史、文献史学といった他分野の最新研究動向も意識しつつ、考察を加えようと試みるわけである。いわば、複眼的な視野のもとに祇園祭を論じるわけだが、この木と森の両方を見ようとする試みが本書で成功したとは思っていない。しかし、この「複眼的な視野」は祇園祭を研究する上で必要不可欠なのである。

山鉦巡行篇に計十二章、祇園ねりもの篇に計九章の総計二十一章という大部の一書になった。これに序章と終章まで加わるわけで、その量に遂方に暮れた読者も多いことだろう。内容が盛り沢山で、おかずがぎつしりの幕の内弁当のような一書になったといえば聞こえはよいが、筆者の力不足により、残念ながらその味や質の高さは保証できない。

「四十にして惑わず」と『論語』はいうものの、執筆に当たって悩んではばかりの筆者はどこが不惑なのか、と孔子（前五五―前四七九）を恨んだものだ。孔子のせいばかりにしているは埒があかない。改めて本書を見直すと、手探りで書いた箇所もあるし、見切り発車で持論を展開せざるを得なかった所も多い。臆病さと大胆さが同居した一書となってしまった感は否めない。私の海馬はその程度である。

思えば、大学院に進学して研究者を目指し始めた頃は、祇園祭礼図や洛中洛外図を観ても、そこに描かれた山鉦について、「函谷鉦だろうか、それとも放下鉦だろうか」「これは霰、油いずれの天神山だろうか」などといった点に考えがすぐに及んで、鉦頭や御神体の人形ばかりに私の眼が行きがちだった。そう、その頃の筆者は、描

かれた山鉾の「答え合わせ」の作業に終始していたわけで、はつきりいつてそれは座学でしかない。全体を見渡す視点が大きく欠落していたのであった。そういった過去を笑い飛ばせるようになったのは実はここ数年という体たらくの有様である。そこでようやく全体を見渡せることができるようになったのである。孔子の言わんとすることが臆げではあるものの今更ながら少しだけ理解できたような気がしている。

祇園祭礼図について研究を始めた大学院生の頃は苦勞の連続であった。何しろ、近世以降の祇園祭に関しては先行研究が少なく、ほぼゼロからのスタートであった。幸いにも、大学院生以上の立場であれば、附属図書館や文学研究科図書館など京都大学の数ある学内図書館の地下書庫へ入庫でき、近世以前の史料の原本に直接触れることができた点は大いに役立った。まさに「史料の大海」を渡る経験ができたのである。幸せな時間であった。翻刻集や影印本に頼らず、必ず原典に直接当たる癖がついたのはこの時の経験が大きい。

筆者の進学した京都大学大学院人間・環境学研究科（以下、人環と略称）は京都国立博物館（以下、京博と略称）と連携協力の関係にあったため、授業は百万遍の校舎ではなく、京博の収蔵庫の中で所藏品や寄託品を実見しながら行うという日本では特異な形式であった。本物を観る眼を養うことができたのは筆者にとって貴重な経験である。付言しておけば、中世祇園会の研究者として知られる河内将芳先生（奈良大学教授）は人環の研究室の大先輩である。同じ研究室から同じ祇園祭の研究者が輩出されるばかりか、河内先生と同じく思文閣出版から祇園祭に関する私の論文集が刊行されるのだから面白いものだ。

狩野博幸先生（京都国立博物館美術室長、京都大学大学院人間・環境学研究科客員教授。いずれも当時）に修士論文のテーマとして勧められ、作品研究を進めて論考にまとめたのが「山鉾巡行篇」第六章で論じた「祇園祭礼図屏風」（六曲一双 京都国立博物館蔵）であった。バードウォッチングさながらに、手持式の数取器を片手に研究室の院生総出で、この屏風に描かれた人物を全て数え上げたのは、今となっては良い思い出である。

院生時代に芽生えた歓びを読者にどこまで伝えることができたか些か不安であるが、筆者と同じような苦勞を未来の若い研究者にしてほしくない。その一心で本書を執筆した。今後の祇園祭研究を思えば、叩き台となる通史の一書がどうしても必要となる。そういう思いがあるからこそ、執筆に当たっては迷う時期が続いたのである。刊行が遅れた言い訳をするつもりはないが、一書を完成させる以上は、筆者には大きな責任があるというものだ。

その存在が身近すぎるせい、かつては遠ざけられていた祇園祭への関心も近年はその潮目が大きく変わり、多くの人々の目が徐々に向けられてきた印象がある。これには、「京都祇園祭の山鉾行事」がユネスコの無形文化遺産へ登録されたことが一役買っているものと思われるが、祇園祭研究という面でみれば、平成二十八年（二〇一六）六月の第五十三回藝能史研究会大会が「いま、祇園祭を見直し、読み直す」をテーマに開催されたこと（於同志社女子大学）は記憶に新しいだろう。筆者も登壇して口頭発表を行い（この内容は本書「山鉾巡行篇」第十二章で論じた）、懇親会の後に、同じく発表を行った西山剛氏（京都府京都文化博物館）と地下鉄に乗り帰宅の途に着いた。その車内で、同氏が「祇園祭の研究も史料や環境が揃ってきましたね」と言った一言が忘れられない。一昔前ならば考えられない発言である。斟酌していた私はすっかり酔いが醒めて正気に戻った。「本当にそうですね」と院生時代に経験した色々な思いを噛み締めながら応えたのである。ほんの僅かな時間の会話だっただけに、このやりとりはおそらく西山氏は覚えてもいないだろう。それほど自然な流れの中で交わされた会話だったのである。祇園祭を取り巻く研究環境は一步ずつではあるが着実に整ってきており、いわば、「祇園祭学」とでもいうべき新しい可能性を大いに秘めた土壌が固まりつつある。本書がそういった流れに加わる一助となれば幸甚である。

西山氏は神輿渡御の研究で知られるが、本書で「神輿渡御篇」を組み込むことができなかったのは痛恨の極みといわざるを得ない。実は神輿渡御の新史料を紹介する「史料篇」として本書の巻末に組み込み、それを「神輿

渡御篇」にかえようかと考えていたが、これ以上頁数を増やせば、ただでさえ分厚い本書が、嫌がらせとしか思えないほどさらに厚みを増すこととなる。これでは読み手も疲れるし、混乱するだけだろう。管見に触れた神輿渡御に関する新出の史料は、いずれ紹介する機会を持ちたい。

今にして思えば、まさか外務省で祇園祭の新史料が見つかるとは思わなかった。ドイツのハインリッヒ親王による明治十二年（一八七九）の山鉾・祇園ねりもの見物の詳細な記録を、外務省外交史料館の史料閲覧室で見つけた時は思わず声を上げた。親王の山鉾見物についてはこれまで新聞記事などの僅かな史料により一部の研究者には知られていたが、同じ年に祇園ねりものも見物していたことは今回初めて明らかとなった。明治期の話だけに、もしも載っていたら幸運だな、との気持ちで上京の機会がある度に外務省の外交記録を渉猟した結果、辿り着いた史料であった。外務省の正式な外交記録だけあって、実に仔細かつ正確性が求められた内容である。これ以上の史料は他になかろう。近代祇園祭を今後研究する上で基礎的な史料となるのはいうまでもない。祇園祭を研究するからといって、祇園祭に関する史料を京都だけで渉猟すれば絶対に辿り着かない。京都で探すだけならば、誰にでもできる。終章で紹介した西尾市岩瀬文庫の「山かけ」の記録もしっかりである。

「学問の細分化」が声高に叫ばれて久しいが、各研究者の専攻が鋭角化すればするほど、自陣に立て籠もってしまいがちである。そうするとどうなるか。他の分野に眼が向かなくなってしまう、方々で得られた研究成果を目にすることなく、頓狂な論考が産み出されるという悲惨な結果が待ち受けている。自らの孤塁を守ったところで何になるというのか。これ以上の悪手はなかろう。安全圏からのみ論述を繰り返していても、新たな成果は産まれない。目先の興味ばかりに追われているようでは未来がない。その意味においては、大学院生の頃に田井竜一先生（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター准教授 当時）より共同研究会「ヤタイの祭りと囃子」（於京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター）に招かれたことは筆者にとって大きな転機となった。この会

は、植木行宣先生や福原敏男先生を始め、祭礼研究の名立たる研究者が勢揃いした場であった。他分野の研究者の成果を吸収し、追いつこうとすることだけで必死だったが、私はその研究会に参加することが毎回楽しみであった。それだけに散会となったのは極めて残念であったが、この研究会での経験が現在の私の血肉となっている。この研究会で知り合えた研究者の方々には今でも何かと御声掛けいただき、わけても福原先生には常日頃より研究上たいへんお世話になっている。感謝の言葉しかない。

いずれにせよ、研究の範囲やその方法を自ら限定してしまえば、対象とした時代の理解やそれまでの常識を覆すような歴史観を得ることは極めて難しい。それだけは本書で避けたかった。孤塁を守るつもりは毛頭ないし、単なる座学に終わらせたくはない。祇園祭にじっくりと対峙し、根こそぎ調べてみようと思ったのである。拡散しがちな研究領域を整理する意味から、これまでの拙い論考や考えを一冊にまとめるにはよい機会であった。本書刊行をご推薦いただいた立命館大学名誉教授の川嶋將生先生には貴重な機会を与えていただき、深謝の意を表したい。

平成二十九年（二〇一七）春に筆者が代表を務める「都のまつり文化研究会」を発足させた。島田崇志氏の「京のまつり研究会」を引き継いで発展させた会だが、会員には、山鉾町で祇園祭へ実際に携わる人も多い。研究者が発表・討論する場合は学会や共同研究会など多くあるものの、祭礼に関わる人々が発信できる場や機会はこれまで皆無に等しかった。祇園祭を始めとする祭礼に携わった人々が発信できる場、山鉾町同士の人々が交流できる機会、それとともに山鉾町の人々と研究者が意見を交換し合える場を設けたいと筆者は常々思っていたのである。

そう、「都のまつり文化研究会」は換言すれば「平成の田中緑紅」を目指す研究会なのである。山鉾町の人々を始めとする祭礼に携わる人たちへ大きく寄り添った会があってもよいのではないかと私は考えていた。祇園

祭のみならず、京都の祭礼文化を何かしら考える上では研究者でなくとも常に博覧強記でなければならぬ。実際に祭礼に携わっているからこそ気付くことも多い。研究者はこういった点を見逃しがちだ。序章で田中緑紅を始めとする四人の在野の研究者を特に取り上げて論じたのは、ここに繋がってくる。

本書刊行に当たっては、出光文化福祉財団の出版助成交付をいただいた。厚く御礼を申し上げたい。この厄介極まりない難物の一書の刊行に際し、活字の一つひとつを拾い、適切で明快な修正を施すだけでなく、数多くの挿図を組んでは直しの繰り返しという根気と忍耐を要する編集作業に当たられた思文閣出版の井上理恵子氏には何とも御礼の申し上げようもない。また、同社の取締役である原宏一氏と編集主任の大地亜希子氏にも多大なご迷惑をおかけした点をここに深くお詫びせねばならない。我儘で注文の多い執筆者であるだけでなく、あまりの遅筆ぶりに一再となく業を煮やされたことであろう。誠に面目のないことである。

当初の予定とは大きくかけ離れ、大部の一書となった点は筆者の我儘でしかない。「山鉾巡行篇」と「祇園ねりもの篇」は分けて二冊にすべきという意見も聞こえてきそうだが、最初から私には分冊にするつもりは一切なかった。一緒になければ意味はない。思文閣出版の方々には私の意向を最大限に汲み取っていただいた。出版事情の厳しい折、快諾してくださり、細心の注意をもって本書の刊行を運んでいただいた思文閣出版には改めて衷心より御礼申し上げたい。

最後に私事となるが、現在このように本書を上梓できるのも、長年にわたり筆者の研究生生活を支えてくれた両親の理解があつてこそである。ここに謝意を表し、本書を締め括ることとしたい。

平成二十九年十一月

八反 裕太郎

465, 500, 520, 521, 525
『独逸国皇孫来航接遇記』
566, 568, 571, 794, 796
東湖八坂神社 32
『徳川実紀』 437
どんどん焼 102, 116, 132, 152, 214,
245, 465, 495, 501, 576, 579, 756, 760, 761,
768
は
博多祇園山笠 919, 920
囃子方 63, 66, 92, 107, 161, 183, 193,
220, 276, 278, 315, 318, 319, 323, 461, 462,
489, 503, 505 ~ 507, 509, 510, 537, 575,
579, 591, 625, 791, 808, 809, 837
囃子台 41, 47, 52, 54, 66, 73, 78, 80, 81,
83, 89, 99, 100, 106, 111, 125, 156, 158, 161,
193, 218, 247, 276, 277, 319, 349, 350, 461,
488, 575, 577, 579, 580, 591
日吉大社 295
曳鉦 154
曳初 199
曳山(引山) 73, 90, 140, 152, 153, 178,
196, 248, 313, 314, 380, 428, 458, 493, 500,
503~506, 511, 512, 520~522, 524, 527,
628, 742
『日次紀事』
7, 125, 139, 346, 390~392, 455, 610
屏風祭 141
『筆満可勢』
458, 640, 650~652, 654, 691, 738, 743
風流 29~32, 55, 87, 113, 114, 351, 355,
373, 387, 395, 425, 431, 468, 509, 604, 616,
627, 640, 641, 643, 644 ~ 646, 649, 694,
696, 697, 704, 755, 837, 874, 907
『平安人物志』 148
平安徳義会 12, 835
鉦納め 61~64
鉦頭 41, 46, 47, 60, 61, 63, 69, 74, 75,
83, 94, 105, 106, 125, 145, 156~158, 182,
183, 204, 210, 226, 229, 232, 238, 245, 274,

329 ~ 361, 366, 367, 428, 451, 453, 459,
463, 488, 579, 927
鉦建て 309
鉦の辻 451
『本朝画史』 45

ま

町絵師 67, 214, 438
神輿洗 9, 155, 169, 170, 172, 213, 234,
455, 460, 605~617, 620, 622~624, 626,
630~634, 639, 640, 643~648, 655~657,
659 ~ 661, 663, 665, 667, 671, 673, 675,
685, 687, 695, 696, 700, 715, 720, 729, 734,
737, 744, 755, 782 ~ 785, 789, 793, 799,
829, 833, 836, 840, 858, 865, 866, 868, 870,
871, 889, 909, 918
見附台 457, 635, 636, 687, 702, 703,
731, 734, 740, 881, 891
都のまつり文化研究会 931
都をどり 763, 776, 783, 825~859, 835,
836, 838~844, 846~851, 853, 869, 872,
879, 880, 908, 910, 912
『都名所図会』 133, 134, 455, 482, 643
『明倫誌』 501, 521
眼鏡絵 143, 144

や

八坂神社文書 7, 55
屋根方 200, 201, 229
山納め 61
山崎 307
山建て 309, 311
有楽会 11, 829, 833~835, 853, 854, 857
宵山 5, 133, 138~140, 145, 154, 155,
173, 180, 183, 203, 213, 218, 220, 230, 232,
233, 235 ~ 240, 451, 452, 460, 463, 466,
488, 489, 495, 514, 526, 730, 744
横浜写真 187, 188, 215, 561, 568, 569,
572, 586, 587, 764, 771, 772, 827
依代 27
寄町制度 55, 86, 99, 351, 393~395

鬨改め 107, 111, 124, 130, 213, 235,
 241~245, 369, 923
 『鑑罪人』 29, 30, 55, 133, 393, 552, 696
 鬨取らず 46, 65, 74, 83, 94, 111, 125,
 130, 159, 164, 182, 242, 315, 340, 345~347,
 356, 367, 385, 427, 453, 463, 480, 579, 804
 鬨取 186
 久世舞車 6
 久豆彌神社 27
 『月堂見聞集』 615~625, 691
 剣鋒 50, 95, 277, 278
 故実研究会 866, 868
 駒形稚児 28, 70, 86, 109, 169, 183, 213,
 305~308, 338, 339, 371, 390, 391, 395, 455
 御覧場所 212, 213
 御霊会 5, 17, 50, 55, 103, 169, 278, 395,
 429, 552, 623
 コレラ 560, 564, 565, 572, 793

さ

『在京日記』 133
 『西遊草』 134~138, 215
 先囃子 644, 646, 650, 652, 661, 666, 688,
 692, 695, 731, 734, 744, 784, 805, 810, 881,
 883, 885, 891, 893, 895, 902
 さくら井屋 217, 219, 233
 棧敷 86, 118, 122, 274, 302, 323, 387, 391
 『実隆公記』 279~281, 288~290
 三条衣棚町 492, 501
 三条衣棚町文書 529, 530
 四座雑色(雑色) 86, 107, 242, 389
 定鋒 307
 地鎮祭 559~598, 803
 字番附 635, 637, 658, 663, 664, 715, 762,
 779, 797
 嶋の内 636, 637, 674
 島原 231, 389, 465, 627, 665, 712, 714,
 747, 791, 792, 859
 『尺素往来』 307
 赤熊 47, 315
 『舜旧記』 70
 乗牛風流 32, 34, 38, 113

少将井駒頭 306, 307
 『諸国図会年中行事大成』
 36, 239, 512, 519, 524, 525, 646, 647
 『諸国年中行事』 236, 237
 所望 614, 628, 666, 691, 738, 806, 811,
 813, 837, 840, 885, 890, 900, 909, 914
 真木 33, 41, 43, 44, 74, 105, 110, 120,
 145, 157, 200, 245, 310, 345, 385, 578~580,
 585, 587
 神泉苑 70, 204, 623
 新地焼け 757, 760, 761, 768
 ステレオ写真 188
 誓願寺 64, 86, 87, 336, 370, 377, 387,
 388, 391~393, 399, 402, 869
 染織祭 874, 875
 『増補華洛細見図絵』 664~667, 670, 761
 『増補祇園御霊会細記』 36, 167, 173,
 480, 493, 494, 501, 513, 523, 647
 底拔屋台 666, 695, 734, 869
 疏水 562, 564, 572, 573, 582, 583, 593, 803

た

大雲院 87, 122, 181, 226, 392, 393, 399
 第四回内国勸業博覧会 193, 194,
 562~564, 583, 593, 594, 803, 816~818
 『大日本年中行事大全』
 156, 157, 176, 182, 650
 山車 187
 出し花 66, 73, 98, 102, 394, 395, 430,
 466, 505, 522, 570
 畜生塚 374~377
 稚児社参 206, 451
 粽 113, 158, 161, 313, 494, 500, 505, 507,
 509, 513, 517, 527, 602
 造り物(作り物) 31, 342
 辻廻し 68, 71, 81, 102, 144, 154, 161,
 186, 195, 461, 489, 521, 537, 569, 583
 天下祭
 103, 129, 130, 423~445, 506, 604, 711
 天王台 33, 46, 47, 183, 204
 天明の大火(天明大火、天明八年の大火)
 116, 132, 140, 147, 149, 170, 171, 245, 447,

【事項名】

あ

後囃子 636, 644, 646, 692, 794, 804, 805,
808, 810, 859, 881, 885, 887, 893, 900, 902
犬神人 47, 71, 84, 86, 95, 98, 113, 128,
131, 174, 308, 355, 370, 371, 378, 387, 455
犬鷹鉾 501
『雲泉莊山誌 別冊第二 家蔵祇園会
に関する資料及文献』(『雲泉莊山誌』)
13
映画「祇園祭」 234, 564, 575
江戸狩野派 104
江戸型山車 81
絵葉書
186, 187, 194~202, 214, 227, 230, 233
絵番附 658~660, 663, 664, 675, 719,
742, 749, 750, 755, 762, 779, 789, 797, 833,
858, 865, 866, 870, 871, 881, 885, 889, 893,
904, 907, 914
エンタイア 195
円通橋 214, 215
岡崎 216, 227, 559~598, 816
お迎え提灯
172, 213, 234, 609, 610, 613, 614, 907
御旅所 66, 120, 336, 427
御土居 57~59, 79, 97, 371, 372, 377, 378
音頭取り 47, 53, 66, 67, 69~71, 73, 78,
80, 90, 95, 100, 101, 106, 107, 143, 169, 175,
220, 276, 277, 489, 505, 506, 510, 511, 537

か

『絵画叢誌』 80, 82
会所 61
昇山 73, 79, 154, 178, 196, 313, 314,
428, 493, 503, 504, 520, 521, 576
鞆鼓稚児 54, 78, 80, 117, 183, 349~351
桂男鉾 33

禿柱 83, 521, 522
『花洛名勝図絵』 215
唐破風造(唐破風) 106, 115, 116, 126,
143, 160, 167, 168, 225, 232, 235, 245~247,
453, 486, 525, 527
観亀神社 913, 914
勸業場 569~571
『翰林葫蘆集』 39
『祇園会細記』(『祇園御霊会細記』) 15,
44, 56, 115, 133, 139, 150, 166~169, 236,
237, 246, 311, 312, 338, 339, 390~392, 395,
396, 451, 455, 480~482, 508, 509, 513, 609,
611, 642, 671
『祇園会ねり物復興記念帖』 14, 865, 866
『祇園会山鉾大鑑』 14, 15, 515
『祇園会山鉾事』 6, 30, 173, 314, 346, 492
祇園乙部 857, 858, 864, 871, 875
祇園甲部 871, 872, 874, 908
『祇園御本地』 165, 166, 504~506
『祇園祭礼式』 306, 307
祇園東お茶屋組合 870, 879~881, 883,
889, 890, 902, 904, 911, 913, 914
祇園又旅所 204
『祇園祭細見 山鉾篇』 15, 16, 234
「祇園祭 全十景」 860~863
『技藝倶楽部』 774~776, 778, 797, 804,
811, 858, 859, 871, 872, 875
北新地 635~637, 740
『嬉遊笑覧』 44
『狂詠都名物集』 237~239, 649
京狩野派(京狩野) 103, 104
『京都御役所向大概覚書』(『大概覚書』)
385~388
京都所司代 86, 87, 121, 122, 127, 128,
181, 392, 393, 397~399, 401~403
京のまつり研究会 15, 907, 931
切妻造(切妻) 106, 115, 116, 126, 130,
160, 167, 235, 245, 246, 453, 486, 525, 527,
581
近世後期風俗画 447~475
近世初期風俗画 247, 403, 447
『近世聞見録』 921, 923

山根有三	331
山元春拳	208
山本梅逸	150, 151
横山華山	132, 153, 154, 155, 239, 349, 447~475, 477~490, 521~523, 525, 533, 539, 542, 549, 550, 554, 555, 690, 729~745, 918
横山派	469, 470, 549, 550
与謝蕪村	141, 142
吉川観方	467, 657, 868, 871, 887, 888, 904, 905

吉田元陳	148
吉村與四郎	849
吉村紀長	849~851, 853

ら

ルイス・フロイス	317, 371
冷泉為恭	158, 284, 526, 527

わ

若原史明	10, 14, 15, 44, 146, 147, 315, 515, 516
------	---

豊臣秀次 374~377
 豊臣秀吉 55~57, 76, 79, 80, 226, 336,
 337, 351, 363~382, 393
 豊臣秀頼 76, 374

な

中神直三郎 774, 775, 778, 811, 812, 836
 長沢蘆雪 740, 741
 中橋狩野家 79
 中村草田男 912
 並河彦兵衛 520
 西川祐信 174, 175
 西洞院時慶 88
 西村楠亭 163
 二世長谷川貞信 820
 二代歌川広重 183
 耳島斎 546, 637, 740
 野村文孝 203

は

ハインリッヒ親王
 564~566, 568, 792, 794~797, 930
 長谷川玉峰 160
 長谷川久蔵 73, 74
 長谷川等伯 48, 73
 長谷川零餘子 199
 秦圓作 762~764
 八代西村彦兵衛 220
 服部茂 221~224
 林屋辰三郎 82, 395
 速水春曉斎 36, 156, 512, 646, 647, 650
 原在泉 221
 樋口富磨呂 849~851, 853
 菱川師宣 430
 秀高 748, 749, 755, 758
 秀磨 660, 749
 平塚瓢斎 667
 不韻斎 180
 細川綱利 112

ま

前川五嶺 160

前川千帆 228
 前川文嶺 140
 前田宗辰 118
 松崎晋二 584
 松平信綱 398, 399
 松田元 10, 15, 16, 167, 168, 234, 576
 松田緑山 185, 240
 松宮芳年 202
 松村景文 140
 松室重光 225
 松本佐多(松本あい)
 789, 790, 797, 799, 804, 808, 812, 813
 松本保居 184~186
 松浦静山 275
 円山応挙 131, 140, 143, 144, 175, 520,
 552, 645, 689, 741, 921
 円山応震 163
 円山応瑞 163
 丸屋善兵衛
 167, 178, 179, 523, 526, 760, 781, 782
 三木翠山 205, 206
 三田村鳶魚 548
 三笥英之 919, 920
 皆川泰蔵 231, 232
 三宅鳳白 208
 宮島春斎 748, 754, 756, 764, 767
 妙法院宮真仁法親王 552, 553
 村上治郎吉 866, 874, 875, 876
 村瀬双石 156
 本居宣長 133, 139, 275, 639~641, 697
 桃田柳栄
 103, 115, 116, 118, 119, 246, 395, 427
 森川曾文 160, 162
 森川保之 156, 176
 森寛斎 613, 827

や

藪長水 221
 藪明山 220, 221
 山口誓子 63
 山口素絢 155, 175, 645, 740, 742
 山縣岐鳳 248

河辺華陰	539, 540
河辺華拳	468, 533~557
河村長観	868
岸駒	140, 448, 468, 730
岸礼	469
祇園井特	155, 610
其角	438
岸連山	238, 469
北尾重政	180, 181
北澤映月	209, 210
北野恒富	544, 849
木下応受	163
紀廣成(廣成)	141, 155~157, 283~285, 499
清河八郎	134, 215
久保田米遷	240
黒川翠山	189~191, 200
黒川道祐	139, 346, 390, 610
景徐周麟	39
月峰	740
幸野樸嶺	203
呉春	448, 468, 730
小林かいち	217~219
後白河法皇	25, 273
後水尾天皇	69
後陽成天皇	75

さ

斎藤月岑	467, 468, 711
榊原佳山(雨村)	484
榊原始更	484
榊原紫峰	483~485
榊原苔山	484
榊原弘	484
佐古慶三	11
佐々木清七	221
澤野忠庵	55
三条西実隆	279
柴田義董	163
島成園	206
ジョアン・ロドリゲス	396
新村出	585, 685, 686, 693, 704

シーボルト	918, 919
杉浦丘園	10, 13, 14, 656, 657, 761, 789, 790
杉浦治郎右衛門	858, 872
鈴鹿野風呂	199
住吉具慶	110, 111, 124, 128, 129, 241, 242
千利休	74
曾我蕭白	448, 730
反町茂雄	113
曾呂利新左衛門	80, 82

た

高浜虚子	199
高谷伸	840
高山義三(高山市長)	890, 902, 908
竹内重方	147, 148
武田五一	226, 227
田島征彦	233
橘日泉	457
田中泰輔	12
田中訥言	551~554
田中緑紅	9~12, 247, 494, 500, 501, 603, 639, 659, 675, 697, 712, 740, 749~751, 754, 756, 765, 767, 774, 776, 778, 779, 783, 784, 789, 792, 813, 826, 829~835, 849, 853, 857, 860, 865, 871, 875, 876, 879~881, 890, 902, 913, 931, 932
月岡芳年	786
常姫	118
土居次義	330, 335, 340, 923
徳川和子(東福門院)	69, 129
徳力富吉郎	230, 240, 241
土佐光起	96
土佐光貞	36, 37
土佐光孚	577
土佐光高	96
土佐光信	279, 281, 553
土佐光則	76
土佐光茂	299~302, 323
富岡鉄斎	202, 543~545, 609
富本繁太夫	458, 640, 650~652, 654

索引

*索引作成に当たっては、各山鉾、絵画作品の名は除外した。項目数は最小限に留めたため、必ずしも網羅的な索引を意図していない。括弧内のみの項目も索引に付した。

【人名】

あ

アーネスト・サトウ	764, 765, 827
朝倉貞景	279
麻田春翠	191
麻田半兵衛	191
足利義輝	302, 303, 323~325
足利義晴	301~303, 324, 325
安楽庵策伝	80
池大雅	145
石井琴水	787
石田有年	211, 212, 569
伊勢屋理右衛門	460
板倉勝重	397, 399
板倉重宗	87, 88, 121, 128, 397, 399, 400, 402, 403
市川君泉	248
伊藤庄兵衛	333~335
伊東深水	210
伊東忠太	225
犬姫	112
井原西鶴	116
岩佐又兵衛	59, 331, 375, 384
上杉謙信	46, 302, 322, 323
上杉鷹山	491
宇喜多一恵	26
碓井小三郎	16, 203, 205, 522
歌川国芳	183, 431, 547, 691
歌川貞秀	182, 502
歌川芳艶	183
有楽斎長秀	177, 178, 523~526,

660, 661, 673 ~ 675, 698, 741, 742, 749, 758, 833

エドワード・モース	191, 192
江良加代	783, 786~789
大岡春朴	141
岡田春燈斎	185, 186
岡本豊彦	140, 163, 457
奥文鳴	739, 776
小澤華嶽	468
織田信長	46, 74, 298

か

海北友松	88
海北友雪	88, 104, 128, 430, 505
甲斐良郷	477
ガスパル・ヴィレラ	316~320, 323, 325
桂青洋	237, 649, 650
加藤遠澤	103, 116, 118, 119
加藤源之助	240
加藤藤吉	905
狩野永岳	140, 539, 540
狩野永徳	45~48, 68, 280, 308, 313, 356~358, 384
狩野永納	123, 124
狩野外記(敦信)	128, 129
狩野山雪	103
狩野山楽	103
狩野宗秀	48, 286
狩野孝信	67, 68, 330, 354, 355
狩野探幽	115, 116, 119, 246, 434
狩野正信	289
狩野光信	68, 330, 354, 355
狩野元信	38, 288, 289
狩野主信	103, 113, 174
川瀬一馬	164
河田小龍	574, 582

◎著者略歴◎

八反 裕太郎（はったん・ゆうたろう）

1972年宮崎県生。関西学院大学文学部卒業、京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程満期退学。現在、颯川美術館学芸員。

〔主な論著〕

『江戸天下祭絵巻の世界——うたいおどりばける』（共著 岩田書院 2011年）、『祇園祭・花街ねりものの歴史』（共著 臨川書店 2013年）、「京都国立博物館蔵「祇園祭礼図屏風」の史的位置」（『美術史』154冊 2003年）、「祇園祭礼図の系譜と特質」（植木行宣・田井竜一編『祇園囃子の源流——風流拍子物・鞆鼓稚児・シャギリ』岩田書院 2010年）、「神宮文庫蔵「祇園祭之図」について——祇園祭礼図の成立に関する試論」（松本郁代・出光佐千子・彬子女王編『風俗絵画の文化学2 虚実をうつす機知』思文閣出版 2012年）、「横山華山の画業展開に関する一考察——「祇園祭礼図巻」をめぐって」（『國華』1417号 2013年）、「描かれた天保一〇年春の京都——蝶々踊図の新出作品を中心に」（久留島浩編『描かれた行列——武士・異国・祭礼』東京大学出版会 2015年）

えがき おんまつり やまほこじゆんこう けんきゅう
描かれた祇園祭——山鉦巡行・ねりもの研究

2018(平成30)年1月24日発行

著 者 八反裕太郎

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話075-533-6860(代表)

装 幀 白沢 正

印 刷 亜細亜印刷株式会社

製 本

©Y. Hattan

ISBN978-4-7842-1906-3 C3071